といふことか、不明確で、どちらとも取られるやうであるが、多分前者であらう。語義から云つても、「が」は前の語に重くかゝるテニハでもあるし。

【かねて耳驚かしたる二堂開帳す】「かねて耳驚かしたる」は、「以前からかね〴〵聞いて驚いてゐた「しば〳〵聞いては耳をびつくりさせてゐた」といふので、聽覺を、耳を人化したる味。二堂は中尊寺境内に在る經堂と光堂。開帳は厨子の戸帳を開いて、其の内に安置してある佛像を人々に拜ませると。前々から、その結構の壯麗を聞いて驚いてゐた經堂と光堂とを見たといふのである。「開帳す」は開帳して見せてくれたといふ意味。

【經堂】キャウダウ。經藏とも云ふ。一切經を藏むる堂。中尊寺の經堂は三間四面で、堂内に八架を設け、清衡、基衡、秀衡三代の寄附した紺紙金泥の一切經三部を藏してゐる。一切經は大藏經とも云ひ、佛教に關する經、律、論、の三藏七千餘卷の稱。中尊寺の經堂には現今五千七百卷を藏してゐるといふ。

【三將の像を殘し】三將の像（清衡、基衡、秀衡）は、今は金色堂に移されて、經堂にはない。經堂の本尊は文殊菩薩である。

【光堂】ヒカリダウ。金色堂のことで、天治元年清衡の建立にかゝるものである。

【三代の棺を納め】清衡、基衡、秀衡、三代の遺骸が納めてある。堂の中央一間四方を中陣として、内陣に佛壇があり、其の内に清衡の棺を納れ、其の後方に當たる左右の間に、又各〻佛壇があつて、左に基衡、右に秀衡の棺が藏めてある。この三代の遺骸は皆木乃伊（ミイラ）となつて殘つてゐるのである。

【三尊の佛を安置す】彌陀、觀音、勢至のこと。

【七寶】七珍ともいふ。金、銀、瑠璃、硨磲（しやこ）、瑪瑙、眞珠、玫瑰（まいくわい）。但し異說がある。

【珠の扉風に破れ金の柱霜雪に朽ちて】珠の扉は珠玉を鏤めた扉。「金の柱」は金箔の張つてある柱。

【頽廢空虛の叢】タイハイクウキヨのクサムラ。面白い熟語である。堂が壞れて、何一つ殘らぬ一面の草やぶ、野原となる筈であつたのにといふ意。

【四面あらたにかとみて】正應元年（皇紀一九四三年、伏見天皇の御代）鎌倉第七代の將軍惟康親王が、平貞時宣時に命じて、金色堂に鞘堂を造らせられたことをいふ。「あらたに」は「其の後になつて」位の意。「四面新にかとみて……」なども俳諧ぶりの文致で、普通ならば「後に至り鞘堂を設け……」といふ所であらうが、乙な言ひ現はしで一段面白くなつてゐる。

【暫時千歳の記念とはなれり】　本來ならば頽廢空虛の叢となるべきところを、覆堂を造つて保護したために、當分の間、數百年千年を經た貴い記念建築物として眺める事が出來るやうになつたといふ意であらう。例の俳家ぶりでわかりにくいが、多分其の邊かとおもはれる。

【五月雨の降りのこしてや光堂】　餘所は陰氣で薄暗く曇つてゐるのに、こゝのみは五月雨が降り殘したので、(五月雨が降らぬので)それで赫耀と光るのか、此の光堂は！　といふ味。

【批評】　俳人の手に成つた散文を特に俳文といふのは、文中に俳句が挿入してある爲めばかりではなく、俳諧の趣味手法を散文の上に應用したからで、言ひ換へれば俳味を有つた文章であるからである。然らば俳味とは、何ぞと云はれると、一寸は言ひ難く、正しくは言ひ盡くし難く、また、專門家と雖も要を得て全を蔽ひ、萬人の首肯するやうな説明はし難いであらうが、ざつといふと、根本に於いて生活と藝術との一致調和する事を要とし、而して成るべく俗を離れ、慾を離れ、世間よりは自然を、賑はしきよりは淋しきを、日向よりは日陰を愛し、言ひ表はし方は、成るべく簡潔に、さびしみのあるやうに、而して雅でも俗でもなく、昔風でも今風でもなく、切り方、つゞけ方、略し方、伸ばし方、餘意のおき方に、一種獨得の曲味があり、從つて獨得のリズムがあるやうにする好み、と云つたやうなものである。その言表方面に於ける一端の説明は、已に前の「語釋」の部に説いてあるが、尙ほ特に擧げたいと思ふのは國語と漢語と、國風の要素と支那風の要素とが、うまく調和して、しつくりと馴れ合つてゐることで、例へば

そも〳〵事ふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭西湖を恥ぢず。松の綠こまやかに、枝葉汐風に吹き撓めて、屈曲おのづからためたるがごとし。

其の氣色窅然として美人の顏をよそほふ。千はやぶる神のむかし大山すみのなせるわざにや。造化の天工いづれの人か筆をふるひ詞を盡くさん。

既に頽廢空虛の叢となるべきを、四面あらたにかこみて、甍を覆うて風雨をしのぐ。

の類ひで、この和語と漢語とを交互に綯ひ混ぜることが自然に文章に變化を與へ、抑揚を與へて居ることは、此の一章を見ても明らなることである。

第十二　幻住庵記

（松尾芭蕉）

――その本文解釋及び批評――

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山と云ふ。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流れを渡りて、翠微に登ること、三曲二百歩にして、八幡宮立たせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚だ忌むなることを、兩部光をやはらげ、利益の塵を同じうし給ふもまたたふとし。日頃は人の詣でざりければ、いとゞ神さび、物しづかなる傍らに住み捨てし草の戸あり。蓬、根笹、軒を圍み、屋根漏り壁落ちて、狐狸ふしどを得たり。幻住庵と云ふ。主の僧何がしは勇士菅沼氏、曲翠子の伯父になん侍りしを、今は八とせばかり昔に成りて、まさに幻住老人の名をのみ残せり。予また市中を去る事十とせばかりにして、五十年やゝ近き身は、蓑蟲の蓑を失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高砂子歩みくるしき北海の荒磯に踵を破りて、ことし湖水の波に漂ふ。鳰の浮巣の流れとゞまるべき蘆の一本の陰たのもしく、軒端葺きあらため、垣根結ひそへなどして、卯月のはじめ、いとかりそめに入りし山の、やがて出でじとさへ思ひそみぬ。さすがに春の名残も遠からず、つゝじ咲き残り、山藤松にかゝりて、時鳥しば〳〵過ぐる程、宿かし鳥の便りさへあるを、木つゝきのつゝくとも厭はじなど、そゞろに興じて、魂呉楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ。山は未申に峙ち、人家よきほどに隔たり、南薫峰よりおろし、北風湖を浸して凉し。日枝の山、比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣垂るゝ舟あり。笠取に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に水鶏のたゝく音、美景物として足らずといふことなし。中にも三上山は士峰の俤にかよひて、武藏野のふるき住家も思ひ出でられ、田上山に古人をかぞふ。ささほが嶽、千丈が峰、袴腰といふ山あり。黒津の里はいとくろう茂りて、あじろ守とよみけん萬葉集の姿なりけり。なほ眺望くまなからんと、うしろの峰に這ひのぼり、松の棚つくり、藁の圓座を敷きて、猿の腰掛と名づく。たま〳〵心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とく〳〵の雫をわびて、一爐の備へいと輕し。はた昔住みけむ人の、殊に心高く住みなし侍りて、たくみ置ける物ずきもなし。持佛一間を隔てゝ、夜の物納むべき處など、いさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何がしが嚴子にて、此の度洛に

上りいまそかりけるを、ある人をして額を乞ふ。いとやすゝと筆をそめて、幻住庵の三字をおくらる。やがて草庵の記念となしぬ。

すべて山居といひ、旅寢といひ、さる器貯ふべくもなし。木賃の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。晝はまれ〳〵とぶらふ人々に心を動かし、あるは宮守の翁、里のをのこども入り來りて、猪(ゐのし)の稻食ひあらし、兎の豆畑にかよふなど、我が聞き知らぬ農談に、日既に山の端にかゝれば、夜坐靜かに月を待ちては影を伴ひ、燈を取つては罔兩に是非をこらす。かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡を隱さむとにはあらず。やゝ病身人に倦みて、世を厭ひし人に似たり。つら〳〵年月の移りこし拙き身の科を思ふに、或る時は仕官懸命の地を羨み、一たびは佛籬祖室の扉に入らむとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫らく生涯のはかりごとさへなれば、終に無能無才にして、此の一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜は瘦せたり。賢愚、文質のひとしからざるも、いつれか幻のすみかならずやと、思ひ捨てゝ臥しぬ。

まづたのむ椎の木もあり夏木立

講釋

元祿三年四月、芭蕉はこの幻住庵に移つて住むこと約半歲、「幻住庵記」はこの間に於ける彼れが佗住居の有樣を記したものである。閑寂を極めた簡素な生活、優悠自適の心境を極度に花やかにして、同時に極度にさびた文章に現はしたもので、俳文の上乘とすべきものであり、また芭蕉が、此の種の文章の中で、最も長い、最もすぐれたものである。吾々は之れに於いて、俳文の味、芭蕉が特殊生活の味、及びその生活と文章と、卽ち內容と形式とが誂へたやうに調和した趣を味はふべきであらう。

芭蕉は正保元年を以て伊賀國阿拜郡柘植(つげのしやう)莊に生れた。松尾儀左衞門の二男で、幼名は金作、後に甚七郎と改め、十七歲で元服して忠左衞門宗房といつた。「芭蕉」の外に風羅坊、桃青、羽扇、釣月、羊角とも號した。十歲頃より、伊賀國上野の城主藤堂良精の嫡子良忠(俳號蟬吟)に仕へたが、良忠が早世した後、家を遁れて京に出で、北村季吟に和歌、俳句を、伊藤坦庵に詩を學んだ。次いで江戶に下り、季吟門なる小澤卜尺、杉山杉風等の許に身を寄せ、小石川關口水道工事

の小吏となつたが、一年ばかりにして辭し、西行、宗祇の風格を慕つて諸國を流浪し、天和元年三十八歳、上京後十年にして深川六間堀なる杉風所有の別墅に居を定め、庭前に芭蕉一株を植ゑて、そのまゝ之れを雅號とした。有名な「枯枝に烏のとまりけるや秋の暮」、「古池やかはづ飛びこむ水の音」等は、この庵での作である。

天和二年の冬芭蕉庵が燒けた。これより一所不在の決心堅く、漂泊の志止みがたくして、長き東西南北の旅に上つた。その四十一歳より四十六歳に至る間の旅の記錄が、『野晒紀行』、『鹿島紀行』、『芳野紀行』、『更科紀行』及び『奥の細道』等である。奥の細道の旅を終はつたのが元祿二年九月で、それから本文の名題なる「幻住庵」に移り住んだのが元祿三年四月であつた。居ること約半歳、「幻住庵記」は此の時の作である。元祿四年の冬また江戸芭蕉庵の人となつて、閑居すること二年餘り、その後元祿七年五月、四國より長崎への旅を志して、まづ伊賀より京都に向ひ、九月奈良を經て浪花に出でたが、痢病にかゝり、十月九日、

旅に病んで夢は枯野をかけまはる

の句を遺し、同じき十二日遂に花屋仁左衛門の離れ座敷で、五十一歳の生涯を終へた。遺骸は門弟に守られ、琵琶湖畔の義仲寺に葬られた。そこに「木曾殿とせなか合せの寒さかな」の句碑が立つてゐる。

【幻住庵】近江國滋賀郡石山村の奥、國分山なる八幡宮の傍らにあつた。九尺四方に三尺の下屋をつけた、鴨長明が方丈記を思はせるやうなもので、芭蕉はこゝにゐて長明に似た生活をもしたのであらう。庵は其の後、この山麓を少し隔たつたさる尼寺の一隅に移されたが、不思議な女人に保護されて、今も昔の面影をとゞめてゐる。幻住庵の額も掲げられてはあるが、それは擬製の第二號で、一如子が筆の本物は奥に丁寧に保管されて、特別の人の外には觀覽を許さぬといふことである。八幡宮の傍らなる舊跡には、今三基の碑が立つてゐる。一つは蝶夢の建てた「芭蕉翁幻住庵舊趾」と刻んだ、長方形をなした竿形の碑である。一つは勢田の雨橋が建てた「芭蕉翁經塚碑」で、もう一つは梅室の筆に成つた「まづ賴む椎の木もあり」の句碑、共に自然石に散らし書をしたものである。「幻住」の意は此の世を幻と觀じつゝ、暫らく之れに住するといふのであらう。而して住する間は我が趣味に合つた理想的の生活をなしつゝ、やがて之れを棄て去る日のあることを豫想したのであらう。

【石山】滋賀郡石山村。こゝには有名な石山寺の觀世音がある。石山寺は仁和寺の屬院で、天平中良辨僧正の開基、勢多川に臨み、近く琵琶湖を控へて名高い景色である。「源氏の間」といつ

て、紫式部が源氏物語を書いたと傳へられる部屋がある。

【岩間】　石山村大字內畑にある。石山寺の南一里半、石山寺から山つゞき、醍醐寺に至る山中で、そこに理性院正法寺、俗に岩間寺といふのがある。岩間寺は石山寺と共に西國三十三札所の一である。

【國分山】　コクブヤマ。石山村大字國分にある山で、石山寺の北西に接してゐる。

【そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし】　「そのかみ」は「その昔」の意。當時。「國分寺」（コクブンジ）は聖武天皇の天平十三年に、國家安穩の祈禱所として、諸國に建立せしめられた官寺で、それに國分僧寺、國分尼寺の二種があつた。『類聚三代格』に、「每國に造る僧寺には必ず二十僧あらしめ、其の寺名を金光明四天王護國之寺とす。尼寺は十尼、その寺名を法華滅罪之寺とす。」とある。東大寺を總國分寺として、その管理の下に國中の僧尼を監督せしめたのである。こゝに謂ふ近江の國分寺の址は、石山寺大字國分（コクブ）に在る。『輿地志略』に、「國分寺は今國分村にあり。塔ありし處とて、大なる礎存在せり。今存する礎を、或は塔の礎といひ、或は門の礎といへり。石と石との間、八間許りあり」とある。

「そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし」は、普通の文體ならば、「そのかみの國分寺の名を傳ふなるべし」といふべきであるが、例の俳家一流の文法で、特に俳文にのみ許された文體ともいふべきものである。奈良朝の昔、此の山近くに國分寺が建てられた、その折の寺の名を負うて今日に及んだのであらう、といふこと。

【翠微に登ること】　「翠微」は『爾雅』に「山未及頂上近旁陂陀之處名翠微。一說山氣青縹色、故曰翠微」とあり、その疏に「謂山未及上曰翠微」とあるのによつて、普通には山の八合目邊の傾斜をなした所とし、時には薄緑の山の色の事と解してゐるが、こゝは決（うつ）く後者の意で、つまり、先づ谷川を渡り、緑の茂みを分け登ること二百歩といふのであらう。それは、此處は麓の流れを渡つて進んだといふ、山麓本位の記事で、又二百歩といへばわづかに六七十間の一町そこ〳〵で、どうしても山頂本位に見て八合目九合目などといはるべき處ではないからである。思ふに翠微の語源は、頂に近い部分を遙かに見上げると、謂はゆる遠山のうす緑で、草木の翠色も麓のよりは微かに淡く見える所から翠微とは云つたので、即ち此の語はも と距離本位の語ではなくして、色彩本位の語であつたのであらう。（從つて赭（あか）ちやけた禿山などは、たとひ八合目でも翠微とは云はぬであらうと思ふ）即ち色彩本位である所から、山頂に近い部分ならずとも、微翠の色を帶びた處は、麓でも之れを翠微といひ、轉じては山の樹林の茂

みをもおしなべて翠微と云つたのであらうと想像される。とにかく此處は「籠の小流れを渡り、翠の茂みに分け入つて、登ること一町餘りの處に八幡宮が立たせられた」といふ意味に相違ない。「翠微に登る」は普通ならば「翠微を登る」といふべき處であるが、向うの翠樹層に重きを措いて、「茂みの中に分け入つて登る」といふ味を、此の「に」で利かしたのである。芭蕉が言葉を大切にして片言隻句に味をもたせたことは、これでも解るであらう。

【三曲二百歩】　俗語でいへば「三度曲つて二百足ばかり行くと」といふ所、普通文ならば「道三たび屈折して進むこと一町ばかり」などいふべき所であるが、それを「三曲二百歩」と云つた爲めに、漢和俗の三語の味、簡潔な味、通な意氣な味、凝つた曲味（きょくあじ）が現はれたので、そこに斯翁の私淑した老杜子美が「語人を驚かさずは死すとも休まじ」と云つた意氣が見えて、何とも云はれぬ面白さである。文章に對して詞遣や句作りなどの形式のみをいふのは穩かでないが、一面から見ると、國語國文の最要義は、言葉といふものの擇び方、使ひこなし方にあるので、かやうな「三曲二百歩」などいふ句が、實は文章に大切な味と命とを與へるのである。

【八幡宮立たせ給ふ】「八幡宮あり」といへば平凡につまらなくなるのだが、「立たせ給ふ」と云つた爲めに、尊んだ味、活かした味が現はれて面白くなつたのである。

【神體は彌陀の尊像とかや】「八幡」は應神天皇を菩薩の化身として唱へ出した名であるが、本地垂跡説によつて、佛者が我が神道の神々を佛に附會した所から、御神體が僧形の八幡になつてゐるところが諸處にある。これも其の神佛混淆の現はれである。彌陀は阿彌陀、梵語Amitabha で、無量壽又は無量光と譯する。西方淨土にいますといふ如來の名。

【唯一】　ユヰイチ。唯一神道で神道の一派。儒佛の教旨を混へない純粹な固有の隨神（かんながら）の道を主張するもの。後土御門天皇の朝に吉田祠官卜部兼倶の創めたもので、天兒屋根命から傳はり、中臣鎌子が祭官意美麻呂に授けたのに起こるといふ。宗源神道、唯一宗源、元本宗源神道などともいふ。

【兩部】　リヤウブ。兩部神道。眞言の金剛界、胎藏界の兩部の曼陀羅の諸尊を我が國の神祇に合同して、本地垂跡の説を立て、天照大神を大日如來、八幡宮を阿彌陀如來などと稱して、神佛二道が習合したもの。兩部の語は金胎の兩部に取つて、神佛二道に應用したのである。

【光を和げ利益の塵を同じうす】　老子の謂はゆる和光同塵を蹈まへた文。「和光同塵」は、神や佛は、その持前の智德をその儘現はしては、餘りに尊くて俗衆には近づき難く思はれる所から、わざと赫々の光を和らげ、俗人と下賤の習俗を同じうして、彼等の間に親しみつゝ多數の人間

を感化濟度して下さるといふこと。「利益」は衆生のさゝげる信仰に對して神佛の授けて下さるお蔭のこと。つまりは資本を入れる事に對するリエキの意味ではあるが、神佛の授け給ふものをば、宗教的には與音でリヤクと讀むのである、「利益の塵を同じうし給ふ」は、例のひねつた俳家の句作りであるが、つまり俗衆の仲間になり、同塵して、廣く利益を施さうとなされる、といふこと。

【神體は彌陀の尊像とかや……又たふとし】「唯一」「兩部」などいふ語はむづかしさうで、實は辭典を引けば何でもないことだが、全體の意義趣味を引きまとめて理解するのは一寸むづかしい。こゝは大體かういふ事であらう。八幡宮ならば御神體は御鏡でもありさうなものだが、この御社のは阿彌陀樣の尊い御姿だといふことである。吉田家一流の、儒佛を交へぬ純粹生一本の神道の方では、神社に佛體を齋くなどいふ事は、ひどく忌み嫌ふことであるが、しかし、それは考へ方次第で、世界をしろしめす尊い御本尊が、廣く衆生を救はうとて、神ともなり、佛ともなり、そしてえらい御威光を和らげて俗人の仲間になり、彼等と賤しい穢い生活を一緒にしつゝ、夥しい御利益を與へて下さると、かう解釋すれば、これも亦、誠に有難いことである、といふこと。

【物しづかなる傍らに住み捨てし草の戸あり】參詣人が無いので、御社がシーンとして、靜かに寂つてゐる。その傍らに、誰れかが、曾ては住んだのであらうが、今は住み捨てられて無住になつてゐる一つの草庵がある。といふこと。「草の戸」は草葺きの小さな家。「戸」は家の一部分によつて全體を暗示した修辭、擧隅法。

【狐狸ふしどを得たり】正面からいふと、狐狸の棲所となつてゐるといふことだが、「臥戸を得たり」といふと、人間が住んで居ると、寄りつけないのだが、人間が退却して空にしておくので、狐やたぬきめ、立派な寢どころを、まんまと手に入れたといふわけだ、といふ洒落れた譬喩の味、また俳諧の味を見せたのである。

【幻住庵といふ】庵の名の深い意味は、此の一篇の文章全體が現はして居るのだが、文章としては、此の六字の短文句が、前後の長い文句の間に挾まつて、變化をつけてゐるところを味はひたい。

【主の僧何がしは勇士菅沼氏……】「主」はアルジと讀む。膳所侯の家士本多八郎左衛門、號を探由居士と云つた人のことであるが、僧としての名を明らかにせぬので「なにがし」とは云つたのであらう。或は知つては居るが、わざとぼかして、奥床しくしたのであらう。「勇士」以下

は、「主僧は武勇の士菅沼氏、俳號を曲翠と云ふ我が弟子の伯父さんであつたが、八年ばかり前に歿くなられ、今は幻住老人の名が記憶されてゐるばかり、姓名來歴すべて忘れられて了つてゐるのである」といふこと。「菅沼氏、曲翠子の」つゞきは一寸をかしいが、「菅沼氏卽ち我が弟子曲翠君の伯父御」の意である。「子」は敬愛の意の添へ詞、「勇士」は武勇の士の意であるが、此の人膳所の藩主本多侯に仕へ、享保五年七月二十日、奸臣曾根權太夫を斬つて自殺したので、特に「勇士」とは云つたのであらう。「待りし」は本來「仕る」と同じやうな卑下の詞で、この場合には、相應はしくないが、鎌倉以來の敬語の亂れを、そのまゝ襲つたのであらう。「今は八とせ」は、一つは次ぎなる「予また十とせ」を誘ひ出す爲めの句である。此の老人が歿くなつて、早いもの、もう八年になるが、此の老人の見捨てたのは娑婆の憂世、私はまた都會に交はる俗生活を見すてゝ、もう十年、五十歳近き身になりながら云々といふのである。

【十とせばかり……五十年やゝ近き身】天和二年芭蕉三十九歳の時、深川の芭蕉庵が燒け失せた。彼れはやう〳〵身を以て遁れたが、それより一所不住の心を起こして甲州に遊び、半歳ばかりを經て歸つた。「市中を去る」とは、これを起點としたので、それより元祿三年の四十七歳までを概算して、十歳ばかりとは云つたのである。

【蓑蟲の蓑を失ひ】住所を失つた事の譬。元祿二年三月奥の細道の旅に上る時に、庵を人に讓つたのを、家無しになつたと見て、蓑を失つたとは云つたのである。蓑蟲は鱗翅類の昆蟲、その幼蟲が絲を吐き、木片などで蓑の形の囊狀の巢を作り、身を包んですむ故に、この名がある。

【蝸牛家を】カタツムリオイヘヲと讀む。蝸牛の殼のやうな小さい、むさくろしい家を離れてといふこと。漢文の古典で、「蝸牛廬」「蝸廬」など言ひ來たつたのを思ひ寄せたのであらう。この一句を「蝸牛の家を」としてゐる本もあるが、これは恐らく「みのむしの、みのをうしなひ、かたつむり、いへをはなれて」と、五七調に疊んだので、「かたつむり、家を離れて」が正しいのであらう。また前句の「蓑虫の蓑を失ひ」を受けた對句としては「蝸牛の殼を離れて」など云ふべきで、「家を離れて」では氣が利かぬやうであるが、芭蕉は恐らく「蝸牛が蝸廬を離れて」といふ味のつもりで、かうは書いたのであらうと思はれる。卽ち引きつゞけての味は、蓑虫が蓑の如き巢を失ひ、蝸牛が渦卷形の殼を離れたやうに、見すぼらしい家を離れて、といふのを、隱喩式にしたのである。

【臭羽象潟の暑き日に面をこがし……】元祿二年芭蕉四十六歳の三月二十七日、江戸を立つて奥羽の旅に出た。平泉以後その足跡の大體は、平泉から新庄に出で、大石田より最上川を下り、

六月三日羽黒山に登り酒田に出で、北に進むと十二里、象潟の勝を探つて再び酒田に歸り、直江津を經て加賀國に入り、七月十五日金澤に着いた。それより由中溫泉、福井を經て、八月十四日敦賀に着き、九月三日大垣に入つた。この間五ヶ月を越え旅程六百里に餘つた。それから九月六日には、伊勢に旅立ち、神宮に詣でて伊賀に歸り、後程なく京都に上り近江の膳所で越年し、翌元祿三年の春、伊勢伊賀に行き、四月幻住庵に入つたのである。

象潟は羽後國由利郡鳥海山の西北麓なる海岸で、松島とも並べられた風光絕勝の地であつたが、文化元年鳥海山の噴火の爲めに埋沒して全く昔の面影を失つた。「奥羽象潟」のつゞきは一寸をかしい。「奥羽及び象潟」の意味では無論あるまいが、さればとて、象潟は「奥羽の半ばなる出羽」の、更に限ると「出羽の一部なる羽後」の一部であるから、奥羽の象潟の意味にしても穩かとは云はれぬ。察するに芭蕉は、象潟前後の旅程が、六月の十六七日頃（陽曆の七月中旬頃）の梅雨あがり、やがて土用に入らうといふ酷暑の折であり、又本文の「暑き日に面をこがし、高砂子歩み苦しき北海の荒磯に踵を破りて」は、主として『奥の細道』の「酒田の湊より東北の方、山を越え、磯を傳ひ、いさごを踏んで、其の際十里、日影やゝかたぶく頃、潮風眞砂を吹き上げ」のあたりを匂はして居るやうに見えるので、此の炎天の日燒けをを象潟だけの事とするのも事實に合はず、また「出羽の象潟」とか「羽後の象潟」とかいふのも何となく調子がわるいので、一つは象潟の前後の事情をも含めたいといふ關心から、つい「奥羽象潟」とは書いて了つたのであらう。そして當代及び後世の讀者が祖翁の名に怖ぢて、一圖に禮讃して了つたのであらう。

また思ふに、此の「奥羽象潟」は、「羽の象潟」即ち「出羽の象潟」といふ意で、「奥」の字は唯だ調子を成すために添へられた帶字であることと、たとへば國家の「家」の字、一且緩急の「緩」の字の類でもあらうか。とにかく普通に解釋しては無理な句であらうと愚考する。

【高砂子歩み苦しき】　タカスナゴ。砂の高く盛りあがつた所。砂丘。『夫木抄』なる「須磨明石浦の見わたし近けれどあゆみ苦しきたかすなどかな」を踏まへたのであらう。

【北海の荒磯】　鶴岡と象潟との間なる砂濱磯傳ひをも含めて、越後から越前まで、日本海に沿うた北陸の旅路を指したのであらう。

【湖水の波に漂ふ】　琵琶湖畔にさまよひ着いた、といふ事を、湖水の縁で、面白く「漂ふ」と云つたのである。そして鳰といふ水鳥が、『古事記』『萬葉』の大昔以來此の湖水の名物となつて、此の湖の別名を「鳰の海」ともいふ位になつて居り、また此の鳰といふ水鳥の巢の作り方が、

蘆の莖を中に取り籠めて水に流されぬやうにし、また莖との接觸面に隙間を作り、水の干滿に隨ひ、上下の移動を自由ならしめて、水より離るゝ憂もなく、同時に水に溺るゝ氣遣ひも無いやうにしてある所から、是等の類似に事よせて、流浪生活中に於ける一時の安全地帶的滯留所といふ意味の譬喩に用ゐたのである。「流れとゞまる」「一本の陰たのもしく」など云つたのは、そのためで、總じて此の邊は修辭學に謂はゆる隱喩の味を利かせ、普通の直喩にすれば「蓑蟲の蓑を失ひたるが如く」、「蝸牛の家を離れたるが如く」、「波に漂ふ如く」、「鳰の浮巢が蘆の莖にすがり止まる如く」、「一本の蘆を賴もしがる如く」、といふべき所を、打つて一丸となして、蓑蟲、蝸牛、鳰の事を、直ちに芭蕉自身の事にしたといふ簡淨の味である。

鳰は鴨に似て小さい水禽。色は蒼黑くして斑がある。胸は黃色で紫斑があり、腹は白く、尾は短い。巧に游泳しよく水中をもぐる。「鳰」の字は水中に入る鳥なるより入鳥の二字を合はせたので、ミホともいふ。また俗にはカイツムリ、ムグリなどもいふ。

【卯月】陰曆四月の異稱。

【やがて出でじ】新古今集卷十七に西行法師の歌として、「芳野山やがて出でじと思ふ身の花散りなばと人や待つらん。」とあるのを蹈まへた隱し引きの味。ほんの一寸のつもりで入つた山ではあつたが、そのまゝ長く居ようかとまで思ふほど、染み〳〵氣に入つて來たといふこと。

【さすがに春の名殘も遠からず…】「さすがに」は「しかしながら」の意。前段「卯月のはじめ」を承けたので、陰曆では四月、五月、六月の三月を夏の領分とした、而してこれは夏の第一月なる四月の、しかもその初めだから、「夏とはいふものの、然しながら、まだつゝじの咲き殘りもちらほら見え、山藤なども見えて面白い」といふこと。「春の名殘も」はつゝじから山藤までかゝつてゐるので、時鳥からは夏の本部のつもりで書いたのである。

【宿かし鳥、木つゝき】『風俗文選』によると「宿かし鳥」は燕のことである。「かし鳥」はカケスのことであるが、燕は、人が軒下、店頭などに、巢を營むべき宿の下地を作つて貸し與へるので、「宿かし鳥」とは、しやれて言つたのであらう。こゝは例の引喩で、幻住庵を修復して貸すといふ親切な便りさへあるものを、たゞ貸して貰ふ家だ。破壞專門の啄木鳥が來て、つゝいていたづらする位、何の氣にかけるに及ばうかと、上機嫌に洒落などいひつゝ、といふこと。「木つゝきのつゝく」はそのまゝでも面白く解るが、『源平盛衰記』卷十、「守屋啄木鳥と成る事」の條に、「昔聖德太子の御時、守屋は佛法を背き、太子は之れを興し給ふ。互に軍を起としゝかども、守屋遂に討たれけり。太子佛法最初の天王寺を建立し給ひけるに、守屋が怨靈、

かの伽藍を滅ぼさんがために數千羽の啄木鳥と成つて、堂舍をつゝき亡ぼさんとしけるに、太子は鷹と變じて、かれを降伏し給ひけり。されば今の世までも天王寺には啄木鳥の來ることなしといへり」とあるのに思ひ寄せて書いたのであらう。こゝの「宿かし鳥」と「啄木鳥」とは唯だ洒落の材料に使つたので、是等二種の鳥が來るとか來たとかといふのではない。啄木鳥は攀禽類の一、嘴は眞直で堅く、舌は細長く、先が逆鉤となり樹をつゝいて皮下の昆蟲を引き出して食ふに適する。此は四本で、二本づつ前後に向つて木に攀づるに都合よく、尾は強くして、樹の幹の上にてよく體を支へる。

【そゞろに】「すゞろ」に同じく、心の自然にすゝむこと。何となく勢強く引かるゝこと。

【魂吳楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ】前の句は杜甫が「上岳陽樓詩」に、

昔聞洞庭水。今上岳陽樓。吳楚東南拆。乾坤日夜浮。親朋無一字。老病有孤舟。戎馬關山北。憑軒涕泗流。

とあるにより、後の句は宋の詩人黃山谷が惠宗の蘆雁の畫に題した詩に、

惠宗煙雨歸雁。坐我瀟湘洞庭。欲喚扁舟歸去。故人道是丹青。

とあるのによつたのである。

瀟と湘とは共に河の名で、洞庭湖の南を流れる。湘水は永州府の北を流れ湖の入口で瀟水と合流する。此の二水の附近には「平沙落雁、遠浦歸帆、山市青嵐、江天暮雪、洞庭秋月、瀟湘夜雨、煙寺晚鐘、漁村夕陽」といふ謂はゆる「瀟湘八景」があつて、風光の絶佳を以て聞こえ、殊に八景一組の風景美の模範的先例として名高い。

洞庭は長さ三十里、幅二十三里、支那第一の大湖で、湖南省の北部にある。湘江の外に沅江、資江等を入れて岳州府の北より揚子江に注ぐ。湖中には君山・明山・石門山等の小島が散在し、その中君山が最も名高い。

このあたり、例の簡潔な、洒落な、主客をごつちやにした、俳諧的、隱喩的の筆致で、說明しにくいが、大體は此の幻住庵から琵琶湖畔の名勝を見はるかす事に於いて、自分は杜子美が岳陽樓から洞庭瀟湘を望み、黃山谷が惠宗の同じ湖江を寫した名畫に見とれた二大風流を、ほしいまゝにすることが出來るといふことで、それをば芭蕉自身と杜甫山谷と、琵琶湖と洞庭湖とを、主客ごつちやにして、極度の勝手ながら、又極度に面白く書いたのである。も少し委しくいふと、杜甫が上岳陽樓詩には「吳楚東南に拆け」とあつて、東南の方面にあたつては、吳楚の二國が相分かれ相並んで、遙かにつゞいてゐる遠景を賞するとが出來ると云つたが、此

の石湖に沿ふ準岳陽樓ともいふべき幻住庵に立つて眺めると、魂がそゞろに浮かれて大杜甫と共に東南につづく吳楚の遠景を幻に見るやうな心地がする。また黃山谷は惠宗の煙雨歸雁の圖を見て、すつかり瀟湘洞庭のほとりに立つた氣持になり、いざ歸らうとして、舟に喚びかけると、惠宗が笑つて「オイ〳〵とぼけちやいかんよ。その舟人は畫だぜ」と言つた、と書いてあるが、私も此の庵で近江八景に取りまかれてゐると、まるで黃山谷が現をぬかした瀟湘洞庭に立つて居る氣になるのだ、といふ味である。かういふ文章は、わが王朝や唐宋の古典趣味と元祿俳人の瓢逸な諧謔趣味との面白く調和した、――といふよりは寧ろ立派な古典を自由に使ひこなして、我が藥籠中のものとした俳諧の風流を味はゝばねならぬので、試みに此處丈を現代文式に譯して見ると、まづかういふのであらう。こゝに移つたのは四月の初め、夏とはいへどまだ春の面影が相應に殘つてゐて、咲き殘りのつゝじや、松の枝に垂れた山藤などの味な眺めがあり、それに時鳥が折知らせ顏に、時々啼いては過ぐるといふ、初夏新綠の選まれたる好い時節である所へもつて來て、「宿貸さう〳〵」と啼いて呼ぶ親切な鳥が音信れて來るのに、啄木鳥のつゝく位何の氣にかけるに及ばうか、家を貸さうとて招く人さへあるのに、破れをつくろふ心配は無用の事だなどと、好い氣分で洒落などいひつゝ來て見ると、遠望は吳楚の分岐連亙を思はせて岳陽樓に立つた杜甫の風流を分前し、近景は惠宗が煙雨歸雁を偲ばせて、身は宛ち瀟湘洞庭に立つ心地がするではないか。

といふので、是れは洞庭瀟湘に繕り合はせての譬へ話だが、さて今度は此の幻住庵から見る四方の形勝を列べ記すとかうだ、と云つて、周圍の記述に移つたのである。

【山は未申に峙ち……北風潮を浸せり】　例の俳諧的風流の文であるが、「山」は國分山のことで、即ち此の庵の立つてゐる山は西南の方角に峙つてゐるといふことと、言ひ換へると、國分山の東北麓に此の庵が立つてゐるといふことである。「人家よき程に隔たり」の人家は國分村の家並で、翁は此の村との距離が氣に入り此の家並の遠望を愛したと見えるが、彼れが「よき程」と云つたのはどれ程の距離で、どんな工合の隔たりかと、それを研究する爲めに、東京からわざ〳〵近江まで出掛けて行つた好事家もある。とにかくこんな事に於いても、俗塵を離れた幽邃な自然を愛すると同時に俗世間を懷かしんだ芭蕉の趣味が窺はれるであらう。「南薰峰よりおろし」は、時しも初夏なので、青葉を吹く、薰りのよい、暖かい南風が、此の山の峰から吹きおろして來るといふと。峰は同じく國分山で、一つは西南に峙つてゐるから南薰とは云つたのであらう。薰風は夏の風、新綠の香りよき風で、我が古典語の「青嵐」にあたつてゐる。『史記』なる

舜の歌に「南風之薰兮、可以解吾民之慍兮」とある、又朱熹が四時に於ける讀書の樂を詠じた律詩の夏の結句に、「讀書之樂樂無窮、一援琴一奏來薰風」とあるなどを見て察せられる。

「北風湖を浸して涼し」は、初夏の季節に因んで、湖水越しに吹いて來る北風の涼しさを悅んだので、句作りとしては、「南薰峰より」に對して「北風湖を」の對偶を悅んだのである。

【日枝の山】ヒエのヤマ。比叡山のこと。近江と山城との間にある名山。高さ二八六〇尺、略して叡山といひ、天台宗に屬する所から、台嶺ともいひ、南都に對して北嶺ともいひ、又鷲の御山、都の富士などとも稱せられる。山上に延曆寺根本中堂がある。

【比良の高根】近江國滋賀郡木戸小松二村の西に聳え、琵琶湖の西岸にある。海拔二九〇〇尺、この邊では最も高く、雪の降ることも最も早い。その暮雪の景は近江八景の一である。

【辛崎の松】唐崎とも書く。滋賀郡滋賀の里の東の湖岸にある。そこに一本の老松があつて、千餘年を經たといはれたが、近年全く枯れてしまつた。この地の夜雨は八景の一。

【城あり】膳所城。慶長六年德川氏が關西諸侯に課して築いたもので、湖岸の一美觀である。本多氏の城府であつた。

【橋あり】瀨多橋のこと、謂はゆる瀨多の長橋で、唐橋ともいはれる。俵藤太秀鄕が百足退治の傳說で名高い。昔は宇治、淀と共に我が國の三大橋と稱せられた。

【笠取】カサトリ。笠取山で山城國宇治郡にある。醍醐山の東に聳え、近江の國境に接してゐる。歌枕として名高い。

【早苗とる】苗代田の苗を取ることだが、「取る」は拔き取るのではなく、手に取るの意で、手に取つて田に植ゑはさむこと。挿秧といふ。「さ」は早の意かといふ、稻の苗に限る一種の美稱である。

【水鷄のたゝく】その鳴く音が戸をたゝくやうに聞こえるので、此の鳥の鳴くことをたゝくといふ。水鷄（クヒナ）は涉禽類の一種。體の長さ七八寸、幼い鷄に似てゐる。體は黃褐色で白い斑があり、腹は薄い灰色で、脚は長く赤褐色である。水邊に棲んで小魚を食ふ。

【三上山は士峰の俤にかよふ】三上山は近江國野洲郡にある山で、俵藤太の傳說の蜈蚣の棲んでゐたといふ山。姿が富士山に似てゐるので、近江富士とも呼ばれる。士峰は富士山の略名。

【武藏野のふるき住家】實は大都會なる大江戸の一部を、風雅めかして武藏野とは云つたので、江戸深川の芭蕉庵のことである。芭蕉庵からは富士が眺められたので、近江富士を望むと、深川の舊棲が偲ばれるといふこと。

【田上山に古人をかぞふ】　田上山（タナガミヤマ）は近江國栗太郡田上村にあつて、そこに猿丸太夫の墓がある。その墓の苔を掃つて古の名歌人を偲ぶといふと。「かぞふ」と云つたのは、猿丸太夫の他にも名のある古人の墓や傳説などが殘つてゐるので、それを指折りかぞへて古を偲ぶといふのであらう。『方丈記』にも此の山に猿丸太夫の墓を音づれたことが書いてあるから、鴨長明も偲ばれた一人であるかも知れぬ。

【笠取に通ふ】　此の邊、名詞だけを拾つて解くのは何でもないが、事と味とを考へると相應にむづかしい。總じて此のあたりの景物は、幻住庵の眼前脚下から可なりな距離の遠望にまで及んで居るので、それらを記述の都合本位に、面白をかしく組み合はせ言ひ做したためであらう。例へば「笠取に通ふ木樵の聲」は、文法的には笠取山に行く樵夫の話聲のとのやうで、それならば笠取ならぬ何處の里での話聲でもよいわけであるが、こゝの眞意は多分、笠取山に於ける樵夫の木を伐る音及び之に伴ふ樵歌のことであらう。又「木樵の聲」と云つたので、その聯想から「早苗とる歌」と對させたので、この「麓」は國分山、笠取山、その他近傍のどの山の麓でもよいのであらう。又「早苗とる」から田の緣で「螢飛びかふ」といひ、「水鶏のたゝく」と續けたので、凡ては俳諧連歌の心持で、卽かず離れずに轉々したのであらう。そして前の「城あり、橋あり、舟あり」の眼本位なるに對して、伐木、樵歌、早苗歌、鳥の音と、耳本位の趣味を並べたのであらう。また三上山に富士を偲ぶと云つた緣にちなんで、田上山に古人を思ふとはつゞけたのであらう。

【さゝほが嶽、千丈が峰、袴腰】　その界隈の山といふだけで、いづれも詳しい事が解らない。

【あじろ守とよみけむ】　黑津の里は、田上山の麓にあるといふ。「あじろ守」といふ歌は『萬葉集』に見えないので、寄せの味は解らないが、黑津の里はいと黑うなど洒落れて居るところを見ると、黑津の里が杉や檜などの常磐木で眞黑に茂つて居るのが、宇治の網代の番人が日やけして、眞黑になつた顏に似た、といふやうな古歌があつて、それが萬葉にあつたと覺え違ひしたものでもあらうか。あじろ守は網代の番人、網代は川瀨に網を引いたやうに竹木を編みつらねて、魚を誘ひつゝ、その流れの末に簀をあてゝ魚を捕るもの。「萬葉集の姿」は萬葉集の歌そつくりの趣だといふのであらう。

【なほ眺望くまなからんと】　クマは物の隅、屈折して入り込んだところ。轉じて隱れたところ、奥まつたところをいふ。こゝは後者で、尙ほ好い眺望は、隅々に隱れてゐるのをも、殘さず見ようといふので、といふこと。

【這ひのぼる】「這ひ」は手を使ふやうにして登るので、山路の急なる事を匂はした筆致。

【松の棚つくり、巢の圓座を敷きて猿の腰掛と名づく】山の峰の高い上に、更に少しでも高くして遠くを見はるかさうとて、松の枝の間へ持つて行つて、空中高く鳥の巢の樣な腰かけの棚を作つて、戯れに「猿の腰掛」と呼んだといふと。「松の棚つくり」は、曖昧ではあるが、地べたに松の木で棚を構へしつらへたことではあるまい。此の「腰掛と名づく」の次ぎに、餘りに故事の引用がやゝこしいので左の

かの海棠に巢をいとなび、主簿峰に庵を結べる王翁徐佺が徒にはあらず、たゞ睡辟山民となりて辱顏に疋を投げ出だし、空山に虱をひねりて坐す。

の數句を省いたが、この「海棠に巢を營び」といふのは、徐老といふ隱者が、道を樂み、藥屋となつて市中に隱れ住んだが、家に數株の海棠があつたので、其の枝の上に巢を營み、そこに坐つて地上の人と談話を交はしたといふ故事がある。それを取り入れたのである事に連想すると、是れは必ず松の枝の間の空中に鳥の巢の樣な座を構へて、そこにわらうだを敷いては、かうやつて枝の間に尻を掛けた所は、さながら山の猿同樣ではないかなどと、飄逸に笑つて、その圓座を「猿の腰掛」と名づけたといふのであらう。サルノコシカケは胡孫眼など書いて、大きい、固い、鳶色の木の子の事をいふが、こゝはあの茸の聯想で書いたのではなく、木の間に腰かけた恰好を、木の上にしやがんだ猿に見立てゝの滑稽であらう。圓座はワラウダ（藁蓋の轉便）とも讀むが、こゝではヱンザと讀んだのであらう。藁や菅や藺などで渦まき形に圓く編んだ敷物である。子供になり、猿になつたつもりで、すつかりおどけて書いてゐるが、それでゐて何とも云はれぬ品位を見せてゐる所が、斯翁の俳諧上乘のユーモアである。

【たま〳〵心まめなる時は】「心まめ」は氣の進むこと、物うくないこと。こゝは多分、長明が『方丈記』に「讀經まめならざる時は、みづから休み、自ら怠るに、妨ぐる人もなく」とあるのに思ひ寄せ、其の逆を行つて一種の俳諧味を見せたのであらう。そして文章聯絡のほんとの味はすぐ前の省いた部分に「空山に虱をひねりて坐す」とあるのにつゞけて、不斷は概して坐り込んで、不精をきめてゐるが、氣が進んで、動的氣分になつて來た時は、谷へも下りる、と云つたのであらう。この「谷清水」は庵の後ろの崖を少し下つた處にある。

【とく〳〵の雫をわびて：】此の邊文字の表面はあつさりしてゐて造作もなささうに見えるが、味ひの說明はなか〳〵難い。まづ斯ういふ事であらうと思ふ。

「とく〳〵の雫」は、西行法師が『山家集』の

とく〳〵と落つる岩間の苔清水
くみほすほどもなき住居かな

にちなんで、吉野山なる西行庵の苔清水を思ひ寄せたのであらう。同時に、その苔清水で吟じた芭蕉自身が四十一歳の折の作なる「露とく〳〵試みにうき世すゝがばや」をも思ひ寄せたのであらう。「とく〳〵の雫」は少量の泉のとツく〳〵と滴り落つる擬態の形容で、今ならば「ぽッたり〳〵と落ちる」といふところである。「雫」とある所を見ると、これは地下から滴々と湧き出でて、凹所に溢へる所の形容ではなく、苔のむした崖などから滴り落つる趣であらう。「わびて」は、乏しきを淋しみ果敢なむ味と、それに趣味を見出だして安んずる味と、も一つ更にそれに無上の高き意味を見出だして大愉悦を感ずる味と、此の三義の重つた味ひの語で、一語意義重疊、この一鎖の文の鍵ともいふべきものである。「わびしいと思ひつゝ、その佗びしさを懐かしみ、同時に誇りを感じて」といふことで、言ひつゞけると……「ぽッたりと〳〵と雫のやうに滴りおちる乏しい清水をば、嗚呼さびしいな！　いや〳〵天下無二の味だな！　と、深い悦びを感じつゝ、汲みためて來ては、たつた一つの小さい爐で、茶を煮、飯を炊ぐ樂みの心輕さよ」といふことであらう。「いと輕し」は業々しからず、負擔を感ぜしめず、細くして深い簡素至極の味をもつてゐること。王侯富豪が金に飽かして、多量の水を汲み、大きな鍋釜を用ゐ、すばらしい設備をした臺所で、山海の珍品を料理つては、滿堂の賓客をもてなすといふが如き、貴族、政治家、實業家などに見るやうな分量本位、積極本位の趣味を向うにおいて、その反對を考へれば、此の「わびて」の本意がわかるであらう。

【はた昔住みけむ人の……】「はた」は又といふこと。「昔住みけむ人」をば、諸註概ね、前の住人、即ち幻住老人のことと解してゐるが、さうではない。「けむ」は過去の想像で、この「人」は想像された人である。大意は、偉い人が、高尚な心を以て、風雅に住んで、屋作り什器などに數寄を凝らした後を引き受けると、先住が風雅の跡を傷けまい、後住は段劣りだ、さすがに先住は偉かつたなどと比較されまい、などいふ心配があつて、安心の出來ぬものだが、此の庵は、裸一貫の小茅屋で、さういふ先住に對する遠慮や、氣づまりや、心配が更に無いといふこと。前段からつゞけると、周圍が佗び住居に適し、「家」の歴史にも、窮屈な思ひをさせる分子が少しも無くつて氣が樂だといふことである。

【持佛一間を隔てゝ夜の物納むべき……】持佛は持佛堂の義で、持佛堂は持佛又は父祖の位牌を安置する部屋。持佛は居室に安置し、又は身に副へ持つて信仰する佛。即ち持佛堂が一間あり、

そのかげ夜具を納れるしつらへなどがあつて、一通り便利に出來てゐるといふこと。

【さるを】「然るを」で、「ところが」といふ程の意。處はよし、遺慮のある歴史はなし、家も便利なり、此上の慾には、此の庵の名刺標札ともいふべき額でもあればと思つてゐる所へ、願つたり、叶つたりで、名書家の扁額を得た、とつゞく味である。

【筑紫高良山の僧正】高良山は筑後國三井郡府中驛の東方にある山で、山頂に式内高良神社が祭つてある。祭神は玉垂命、中世以降此の國の一宮として諸社の上に立たれた。又例の兩部混淆で、こゝに神宮寺があつて、僧正が住してゐたのであつた。僧正といふのはその神宮寺の僧正である。此の社今は國幣中社である。僧正は僧官の第一で、最初は一人であつたが、後には大、正、權の階級が出來て、その定員も十餘人となつた。

【加茂の甲斐何がし】加茂神社の祠官藤木甲斐守敦直、能書家で書博士となつた。藤木流第三十五世。慶安二年六十八歳で歿した。

【嚴子】子の尊稱。嚴父、嚴師などの類。

【洛に上りいまそかりけるを】京都に上つて居られたのをの意。いまそかりは「在り」の敬語。います、おはす、などと同じ意。

【やがて草庵の記念となしぬ】「記念」は「かたみ」と讀む。思出草といふのである。但し此の思出草は、芭蕉が、此の庵に移り住む早々、折よくも九州高良の僧正なる高德能書の上洛があり、その筆蹟を掲げたのはうれしい事であつたといふ、自分の想出草にしたといふので、曾て芭蕉が住んで此の額を掲げたといふ後世の記念にしたといふ意味ではない。また文致からいふと、「草庵にかゝげたり」などいへば、それッ切りで面白くもない處を、「まんまと長い想出草となし了せた」と云つたから、風情を增したので、かういふ一寸した處に文章の妙味のあることを知るべきのである。で、「さるを」からの大體のつゞきは、「ところが、九州高良神社なる神宮寺の一如僧正、この人は加茂神社の祠官、名高い能書家なる藤木甲斐守の子息で、これも能書の聞こえ高き高德であるが、此頃丁度上洛して京都滯在中であるのを幸ひ、人を介して扁額の揮毫を乞うた所、早速快諾、苦もなく達筆を揮つて、「幻住庵」の三字を書いておくられた。うれしやと、そのまゝこの草庵に於ける形見の想出草とはしたのである、」といふ意。「人をして額を乞ふ」は、文法違ひのやうで變に見えるが、「人して乞ふ」とほゞ同じく、「人を介して乞ふ」の意で、文法的にも別に差支ないであらう。

【すべて山居といひ、……さる器貯ふべくもなし】あつさりと書いてあるが、意味深長な名文で

ある。「之れを要するに、山中獨處のわび住居ではあり、旅行中の少し長びいた草枕といふだけではあり、これと云ふべき由緒の調度什器などを貯ひ得る筈がない、」といふこと。「すべて」は、總括していふとの意で、「要之」と同じである。「さる器」は然るべき立派な道具といふこと。

【木曾の檜笠、越の菅蓑】翁は元祿元年、越人と共に名古屋を發ち、木曾路を經、信州に入つて姨捨の月を賞した。それは『更科紀行』に出てゐる。前者は其の旅の記念といふのであらう。翁はまた前に擧げた奥の細道の旅で、越後から越中越前を經て美濃についた。後者はその旅の記念であらう。二つとも前の句の「山居」「旅寢」を承けて非常に面白い。

【まれ〳〵とぶらふ人々に……】「とぶらふ」は訪問すること。弔ふ事ではない。「心を動かし」は悅びの爲めに動かすのか、迷惑の爲めにか、不明だが、多分遠來の疎い客の來訪に接して、またお客で安靜を妨げらるゝかと、はら〳〵することも、稀にはあるといふのであらう。而して、次ぎなる罪の無い里人の百姓話には、珍しさについ釣り込まれて、いつの間にか夕方になるといふのであらう。「宮守の翁」は八幡宮の神主のこと。

【猪の稻食ひあらし、兎の豆畑にかよふ】かういふ場合の「の」は、今の口語の「が」にあたる所で、「猪が稻を食ひ荒らしたとか、兎が豆畑にやつて來るとか」といふことである。

【農談に、日既に山の端にかゝれば】此の「農談に」から、次ぎの句に移る味が、よくいへば微妙、わるく云へば曖昧だが、芭蕉の本意は、多分、前の「まれ〳〵とぶらふ人々に心を動かし」は、それ丈で打ち切つて、「日既に山の端に」の句へは關係せしめず、唯だ宮守以下の句だけを、「日既に」以下につゞけたので、而して其の續き方は、

無邪氣な百姓話に聞き惚れてゐると、その中に、いつしか日が西の山に春づく……

といふのであらう。一寸無理のやうな續けざまではあるが、王朝以來の堂々たる大作にいくらもあるので、許さるべきことである。で、此のつゞきを現代語譯すると、かういふ事になる。

晝はまれ〳〵に遠方から訪ねて來る人があると、また安靜を破られるかとハラ〳〵することもあるが、しかし又神主や里人達が、「いやあ、コンチは！」など云つて、無造作に入つて來て、（前の疎遠な人には、「とぶらふ人々」と敬していひ、こゝには「翁をのこども入り來りて」と、馴れ〳〵しく呼びずてに云つて、隔てなき昵近さを見せてゐる。この詞遣ひの微妙さに注意したい）いや、猪のしゝめが稻を食ひあらしたの、兎のやつが豆畑へ來て困るの、と聞いたこともない、たわいの無い百姓咄に聞きとれてゐると、いつの間にか、御日樣

が西の山の端近くなつてゐる・・・

【月を待てちは影を伴ひ、燈を取つては罔兩に是非をこらす】遊び切つた、枯れ切つた、とても面白い名文である。「待ちては」「取つては」は、習慣を現はすテニヲハのつゞきで、「いつも」といふ味のついた意。「臍くりをねだつて駄菓子を買ふ」と云ふと、それ丈の意味だが、「ねだつては駄菓子を買ふ」といふと、「家の腕白め、お母アの臍くりをねだり〳〵しては、駄菓子を買ひくさる」といふ意味になつて、常習を現はすであらう。こゝも其の意。「夜坐靜かに」は、前の猪兎の世間咄の賑やかさに對照したこゝろ。「影」「罔面」は、月に照らされて壘の上に平らに横にうつる、比較的はつきりした影と、油火、蠟燭などの燈火によつて襖や障子に大きく映し出だされた縱の微陰とを書きわけたので、その二つの陰影に、別々の役目を分擔させて、月影に對しては、

たつた一人淋しく坐つてゐる中に、月が出ると、うれしや「影」といふ自分そつくりの道連れが出て來るのだ。

といひ、障子の朧影については、向うが立つて、或ひは坐つてゐるといふポーズを活用して、

月無き夜には、燈をつけると、障子の面に、我れに好くも似た、ぼんやりした影坊子が坐り込む。こいつ怪しいぞ。一體自分が本物であらうか、影坊子が似せ物であらうか、ほんとの芭蕉桃青はこつちか、あつちか、是非如何などと云つては、無邪氣な、禪まがひの問答に思ひを凝らし考へぬくのだ。

といふこと。「罔兩に是非をこらす」は、罔兩に對して是非を考へぬくといふのであらう。まあ此の位の意味かと思ふが、又思ふに、これは或ひは芭蕉が好んだ莊子の「齊物論」の最後にある罔兩と影との問答を踏まへて、それを縮約したものでもあらうか。その問答の初めには、

罔兩問景曰、曩子行、今子止、曩子坐、今子起、何其無二特操一與云々。

とあつて、「景」は光に照らされて生ずる人の影のこと、罔兩は其の影のまはりにちら〳〵して朦朧と見えるお供の薄影のことであるが、大意は、其の影の影なる朧影が、本影に問うて言つたことに、

「おい〳〵影法師さん。お前は今まで歩いてゐたと思つたら、もう止つてるね。今度は神妙に坐つてゐると思つたら、また直ぐ立つちやないか。さう他の尻馬に乘つて騒いでばかり居ちやあ、仕樣があるまい。ちと特自の建前をお持ちよ。」

と、かういふと、影法師が答へて、

そんな認識不足を言ふのは止せよ。何もおれおばかりが、何かに從屬してゐて、本尊の動くまに動くといふわけではないぢやないか。おらが本尊の人間とても同じこと、しかし、これも別に頼うだお方の主體に附いてまはつてフラ〳〵するといふわけではないわな。輪を手ぐつて遡れば、おんづまりの造物主までか、その通りで、世の中は循環の相持だ。みんな自分々々名々の世界があるのさ。君、聞いた事があるだらう。昔、莊周つて奴が、夢の中で、蝶々に化つたとさ。さうすると、すつかり、あの金翅銀翼をひらめかす立派な胡蝶で、莊周が夢の中の一變體だなんてことは、少しも知らなかつたといふぜ。それがふッと醒めると、あの薄ぼんやりした哲學者づらの莊周だらう、そして今度は、今の今まで蝶々であつたといふことは、それこそ夢にも知らなかつたといふよ。さうすると、周の奴が夢に蝶々となつたのか、蝶々めが周となつたのか、更に解らないぢやないか。君はおれが本尊に使ひまはされて動く〳〵といふが、おれだつて一つの存在だ、おれの通りに人間が動くのか、人間の通りにおれが動くのか、そんな事が解るもんかい。と云つた、

といふことが書いてある。これはつまり、世間の知識者どもが、暇に任せ、知識に使はれて、何の彼のと甲論乙駁、あつたら口に風引かせ、あつたら筆を、墨を、紙を、臺なしにしてゐるが、天地同根、萬物一體、世間の物論ものいひなどいふものは、觀ずれば、みんな同じ物だよ、といふ趣意を說いたので、芭蕉は或は、此の趣意をこゝに、暗示的に現はしたのでもあらう。さうだとすると、解釋にも少し手が込んで來て、月に照らされては、はつきりした影が生じ、燈火に照らされては、朦朧たる薄影が出來る。その濃い影と淡い影との間にかはさるゝ齊物論式の問答、對して、罔兩の言ふ所と景の言ふ所と、いづれが眞理であらうかといふ事に思ひを凝らす、といふ樣な事になるであらう。然しさう取るには大分文句に無理が有るので、これはやはり莊子流の趣意を微かに持たせつゝ、月を待ちつけると、影といふ同伴が出來て淋しさが慰められ、月無き夜には燈火の作用で障子にうつるぼんやりした影と對坐して、どつちが本物、どつちが似せ物、いづれが本體いづれが附屬物などいふ事を考へて慰める、といふ事であらうと思ふ。

【かくいへばとて……人に似たり】　こゝから一轉して、前なる「人家よき程に隔たり」の一句が暗示してゐるやうに、自分は閑寂以外には、何一つ好むものがなく、俗世間とは全く緣を絕つて、野の末山の奧にひた隱れに隱れようといふのではない、といふ事を說き、更に過去を懺悔して、實はそれどころではない、昔を想ふと、大冷汗の恥かしい事だらけ、一時は役人になつ

て立身したいと思つたこともあり、又一度は佛寺坐禪堂に入り込んで、天晴れ悟りを開かうなど、柄に無い事を考へた事もあつたが、みんな落第で、その揚句いつの間にか、花鳥風月の自然美に心惹かれ、同時にそれを吟詠する事に特別の興味を感じて來て、しかも、それを生活の身過ぎにして食べてまで行けるといふことになつたので、難有や〳〵と、能なし、才なし、學問なしの一浪人が、此の山水行脚風流俳諧といふ不思議な細々とした一つの業に從事して、生涯を送るといふ事になつたのです。と言つたのである。つまり單純な世捨人的の閑寂らしい事を說いた所へ、世俗道、官吏道、宗敎道といふ大きな反對の要素の數々を掲げ出だし、それを藥籠中に取り入れて、唯だの閑寂好みではない、立派な風流俳諧の大道を大成したのだといふ事を歌つたので、思想趣向の進みからは、反對を取り入れた綜合の大成ともいふべく、また態度の上からは、無限の自卑謙抑によつて、限りなき昂揚の誇りを見せたものともいへるであらう。「やゝ、病身人に倦みて…」は、世間に心を惹かれながら世を捨てた心境を譬へたので、「やゝ」は「適確には譬へにくいが、まづ云はゞ」といふ程の味。まづ世間も面白いが、身は病む、人には飽きる、つい物くさくなつて、世間と交渉を斷つたといふやうな人の心境に似てゐるとでも云ひませうか、といふこと。

【拙き身の科】「拙き」は下手や卑怯の意味でなく、「武運拙く」などの拙くと同じく、宿世の拙く劣れること、運命に惠まれぬことであらう。「科」は愚昧の性を享け運命に惠まれぬ身とて、過去の長い間に爲た事とては、片端から、一種の罪とも科ともいふべき恥かしい事だらけだ、といふ謙遜の詞。

【仕官懸命の地を羨み】官に仕へ役人となつて居る人達が、立身出世しようとては、阿諛、追從、諂の塵、袖の下、臺の上、儕輩の陷擠、眞先駈けての進出冒險など、あつたら命を的にかけて競つてゐる、その立場を羨ましい、けなるいと思つた事もある、といふ味。かういふ文句は詞の表面を美くしくして裏に恐ろしい皮肉を含んでゐるのだから、解釋に油斷されぬのである。

【佛籬祖室の扉に入らむとせしも】佛は主として釋迦如來を指し、祖は主として禪宗の始祖達磨大師を指したのであらう。籬は土地屋敷の境に譬へ、室は特別なる居室に譬へたので、扉は籬に對して門のトビラ、室を承けてはドアや障子、襖になるであらう。佛の道を修行し、天晴れ悟りを開いて、釋尊や達磨大師に近づける程の大覺者になりたいと心掛けたといふこと。「せしも」は「せしかども」の意に使はれてゐるので、一種の俗に訛つた文法である。

【たよりなき風雲に身をせめ…】「たよりなき」は、大官高僧にならうなどいふ境涯に比べる

と、實に心細い、あてにならぬ風景山水の自然美にあこがれて、天下の景勝を見たい〳〵で、散々に無理をして身をせめる、又花が美しいの、鳥が可愛ゆいのといつては、その美しさ、可愛ゆさの藝術的表現に限りなく苦勞するといふこと。「たよりなき」その他すべて謙遜の自嘲であるが、同時にひそかに自ら高しとする意氣は天に冲るの概を見せて居るのである。

【暫らく生涯のはかりごと】例の自嘲、謙抑。幸と、一寸は食つて行けさうにさへなつたので、といふ意。

【此の一筋につながる】此の俳諧道といふ、か細い仕事に離れかねて、生涯を送ることになつたといふ事を、簡單に味はひ深く表はしたのである。

【樂天は五臟の神をやぶり】樂天は白樂天、名は居易（きょい）、中唐の大詩人。「五臟の神を破り」は作詩に苦心して健康を害したといふこと。彼れの句に「詩破二五藏神一。」とあるのを踏まへたので、微妙な詞遣であるが、無理を重ねて、五臟六腑の靈妙なる作用をすつかり破りそこねてしまつたといふことであらう。

【老杜は痩せたり】老杜は杜甫のこと。杜甫字は子美、少陵と號した。杜牧を少杜といふに對して老杜といふ。李白と並び稱せられる唐代の大詩人。「痩せたり」は樂天と同じく、詩に苦心して痩せたといふこと。彼れは「語人を驚かさずんば死すとも休まず」とも云つた。又彼れの友李白が、彼れに送つた詩に、

飯顆山頭逢二杜甫一、　頭戴笠子一日卓午、
爲問緣何太瘦生、　只爲二從前作詩苦一

といふのがある。李白が丁度正午時分に飯顆山のほとりで、杜甫がやつれた顏をして來るのに逢つて、「おいどうしたんだ、馬鹿に痩せて了つたぢやないか」といふと、「何ッて極つてゐるわな、詩作の爲めに始終身をそぐやうな苦心をしてゐるからさ」と云つたといふので、これでもえらい詩人の苦心といふものがわかる。

【賢愚文質】人の性質のそれ〳〵異なること。文は優美な性質、質は質樸な、野暮な性質、「文質」は多分論語に「文質彬々、然後君子」とあるのに思ひをよせたのであらう。而して論語の一は飾りのあやと實質の素材と、といふ意味に使つてあるが、こゝはそれとは意味を異にして、樂天老杜は賢にして、我れは愚なり、樂杜の詩は詞藻豐富にして我が句は地味なり、といふ對照の意に用ゐたのであらう。文章のたちといふ意味でないことは勿論である。「ひとしからざるも」は、例の通り「ひとしからざれども」の意。王朝式には一種の文法ちがひである。

【いづれか幻のすみ　ならずやと】人は怪しまぬが、實は難解な面倒な句で、「いづれか幻のすみかならざらん」「いづれも幻のすみかなるにあらずや」の二句を略し合ひ補ひ合はしめた變體の句作りである。かういふと怪しむ人もあるであらうが、これは『源氏物語』『枕の草子』以來、大古典に於いて慣用されてゐる句作りで、簡潔、多義、曲折を出來すための一種の省略法ともいふべきものである。大意は、かくして私は運命にあやつられ、無能無才ながら、此の俳諧道に身を委ねて、花鳥風月の表現に情を勞して居るのだ、詩人歌人の此の道の苦勞は實に言語道斷なもので、白氏も老杜も、これが爲めに身を害ひ神を傷つけたと云はれる。無論、彼等は賢明、我れは愚鈍、彼等の作は華麗で彩に富み、我等のは樸々として野暮くさし、高下勝劣ひとし並には云はれぬが、しかしながら住める世は同じく、朝にして夕を知らぬ電光朝露夢まぼろしの世であらう。さうではないかと、いろ〳〵考へたが、結句幻の世に何の面倒な小理窟の詮索沙汰、世間の煩鎖を厭うての山住みではないか、佛說禪問答のやゝこしさに失敗しての自然界逃避ではないか、病身人に倦み果てた心持の昨今ではないか、さあ〳〵一切を放擲して、寢たり寢たり、といふので、

どろり！

と横臥したと、まあかういふわけだ。」といふ洒落れた心境、しやれた文句である。

【まづたのむ椎の木もあり夏木立】『源氏物語』の宇治十帖「椎が本」の卷なる薫中納言の歌、

立ち寄らむかげとたのみし椎が本　むなしき床となりにけるかな

を蹈まへたので、更に溯れば、此の『源氏』の歌が緣を引いた『古今六帖』の

うばそくが行ふ山の椎が本　あなそば〳〵し床にしあらねば。

にも、多少の緣はあるであらう。薫の歌は、彼れが佛道修行の先輩、導師とも賴んでゐた、宇治の八の宮が薨ぜられて後、其の家を音づれて、宮が生前御修行の室の設備が、すつかり取拂はれたのを見て詠んだので、大意は、「御無事におはせば、此の椎の木陰の御室に立ち寄つて、君を導師と賴み此の世から救つて戴かうと思つてゐた、其の椎の木陰の修行の御室が、もう主もなき唯だの床となつて了つたわ」といふこと。芭蕉の句は、此の歌を前受けに取つたので、おもなる含蓄は「我が新たに住む庵のまはりには、初夏の新緣がこんもりと美しい木立を見せてゐる。殊にその中には行者が修行堂に附き物とされ、而して源氏の薫が立ち寄らむ蔭と賴ん

だ椎の大木も立ち交つてゐる。頼もしいことだ。見れば第一に、有難いと頼もしく思はれる由緒の椎の木も交つてあり、我が庵をめぐるうれしい夏木立ではある」といふのであらう。「まづ」は第一に頼もしいといふのと、暫らくはこゝで快く過ごせるといふのとの二義を兼ねたのであらう。

あつさりした句ではあるが、芭蕉の心では、之れを一篇の眼目とも巻軸ともしたので、前に費した凡ての文句を此の一句で取りすべるつもりであつたのであらう。即ち此の句は、萬葉の長歌に於ける反歌の役目をなし、碑文に於ける銘の役目をなしてゐるのであらう。芭蕉は人に倦み、世を厭ひ、旅に疲れ、落ちついた安息を求めてこゝに來たのである。弟子達の親切をたのんでこゝに來たのである。來るや否やまづ周圍の初夏の景色をめでたのである。幻の世に於ける一時の安住を悦んで、「幻住庵」の三字を記念に掲げたのである。仕官、悟道といふ類の、春の花にも喩ふべき花やかな世に別かれを告げて、この黒ずんだ綠一色の淋しい夏木立の草庵に入つたのである。而して「まぼろし〳〵」と凡てを思ひすてゝ、ごろりと寢ころんだのである。

【而して後、】

まあ〳〵此處で、暫らくは過ぐせさうだ。我が寂しい趣味に合つて、しかも頼もしい由緒の椎の木もある。あゝうれしい夏木立の草庵ではあるかな。

【批評】以上局部々々の文の味について、委し過ぎる程委しく書いた。改まつての「批評」は、面白いではありませんか。

蘆切り段落の事を簡單に言ふ丈にとゞめることにする。

此の「幻住庵記」は、想も文句も洗錬を極めてはゐるが、組織的の區切などは、極めて自由に、不即不離式に開展させてゐるので、明確に段落を切ることはむづかしい。が、大體上およそ七段位に分けて見ることが出來るであらう。

第一段は、冒頭から「幻住庵と云ふ」といふあたり迄で、此の庵の場所づけ、即ち、庵の在りどころを示した部分である。

第二段は、「主の僧なにがしは」から「思ひそみぬ」迄で、住み着きの部、即ち庵の成立から此處に落ちつくまでの記事である。

第三段は、「さすがに春の名殘も」から、「萬葉集の委なりけり」あたりまでで、四方の眺めの美しい事を記した部分である。

第四段は、「なほ眺望くまなからんと」のあたりから、「草庵の記念となしぬ」までで、新し

い生活ぶりのあらましに、「附」として彼れが生活精神の要約ともいふべき三字の扁額を掲げた記事の部分である。

第五段は、「すべて山居といひ」から「罔兩に是非をこらす」あたり迄で、主として對人、對世間の關係を記した部分である。

第六段は、「かくいへばとて」から最後に近い邊までで、いろ〳〵の境遇を經て、今の心境に落ちつくやうになつた消息を約叙した部分である。

最後の第七段は、「賢愚文質」あたりから最後の發句にかけた結びの部分で、全生涯を夢幻と觀じつゝ、椎の老樹に護られた小さい草庵に、頼もしく一時を住まうと思ひ定めた悦びの告白である。

もつと概括すれば第一、此の庵に住むまでの由來記、第二、四方の眺望と生活ぶり、第三、草庵にゐての心境と、かう三部分位にも分けられるであらうが、七段分の方が面白く、また比較的翁の心を得たものであらうかと思はれる。

芭蕉の文章、即ち彼れが創始したともいふべき謂はゆる俳文の根本味が、どこに在るかといふ事は、相應に難儀な問題であるが、約していふと、二つの反對した要素を面白く、調和結合させて、そこに新しい不思議な精神を吹き込んだ味である。（思ふに是れは元祿の時代精神でもあつたのであらう、西鶴の浮世草子に於ける、近松門左衛門の淨瑠璃に於ける、その根本味は皆同じ事である。）たとへば、和漢の大古典をつかまへて、それを時樣化すると同時に、現在の卑俗語を捉へてそれを古典化する。極度に花やかでありながら、同時に極度にさびてゐる。極度の簡潔味を見せながら、その間に悠揚閑漫の暢びりした味を見せる。わけの解らぬやうな文句を、勝手に切り、つゞけ、端折りながら、そこに何とも云はれぬ風がはりの味を見せる。人生を見捨て果てた、端錢（はしたぜに）にも値せぬやうな大遊びの閑文字をいぢくつて居りながら、人生の一大事以上の興味を以て人を引きつける。大卑下、大謙抑の裡に鬱然巍然たる大昂揚の存在を見せる。といふやうなわけで、とにかくいろ〳〵の矛盾した人生相、表現相が、芭蕉といふ大怪物の大手腕により、きッと束ねられて、何とも云はれぬ、「俳」といふ特殊の風味に纏められる、といふ、これが斯翁の文の特別の味であると、私は思つて居るのである。

第十三　老の姿はかはるとも

——その解題、釋義及び批評——（近松、國姓爺合戰）

仁ある君も用なき臣は養ふこと能はず、慈ある父も益なき子は愛すること能はず。大和唐土さま〴〵に道の巷は別かるれど、迷はで急ぐ誠の道赤壁山の麓にて、親子三人めぐり逢ひ 我が聟とばかり聞き及ぶ、吳常軍甘輝がやかた獅子が城にぞ着きにける。聞きしにまさる要害はまだ冴え返る春の夜の、霜に閃く軒の瓦鯱魚天に鰭ふりて、石壘高く築き上げたり。濠の水藍に似て繩を引くが如く、末は黄河に流れ入り樓門かたく鎖せり。城内には夜廻りの銅羅の聲喧しく、箭窓に弩隙間なく、所々に石火矢を仕掛け置きすはといはゞ、打ち放さん其の勢ひ、和國に、目馴れぬ要害なり。

一官案に相違し亂世といひ、斯かる嚴しき城門事々しく、夜中に敲き聞きもなれぬ舅が、日本より來りしなんどいふとも誠と思ひ取り次ぐ者もあるまじ。たとひ娘が聞きたりとも二歳で別かれ、日本へ渡りし父と如何なる證據をかたるとも、容易く城内へ入れんこと難かるべし、如何は、せんとぞ吁きける。和藤内聞きもあへず、今更驚くことならず一身の外味方なしとは、日本を出づる時より覺悟の前、遂に見ぬ舅よ聟よと親しみだてして、不覺を取らんより頼まれうか頼まれぬか一口商ひ、否と云はゞ卽座の敵、二歳で別かれし娘なれば我等とも行逢姉、彼奴孝行の心あらば日本の風も懐かしく、文の便りもあるべきに頼まれぬ心底、我れ竹林の虎狩に從へし島夷を、軍兵の元手にして切り靡ける程ならば、五萬や十萬勢の付くは際いらず。なんの人頼み此の門蹴破り不孝の姉が首捻ぢ切り、聟の甘輝と一勝負と、躍り出づれば母縋り付き押止め、其の娘御の心入は知らねども、夫につれて世の中の儘にならぬは女の習ひ、父とは親子御身とは胤一つ、他人は自ら一人にて海山千里を隔てゝも、繼母といふ名は遁れず、娘の心に親兄弟戀ひ慕ふまいものでもなし、其の所へ切り込んで日本の繼母が妬みなりと云はれんは、我が恥ばかりか日本の國の恥。御身不肖の身を以て韃靼の大敵を攻め破り、大明の御代に返さんと大義を思ひ立つからは、私の恥を捨て我が身の無念を堪忍し、人を懐け從へ一人の雜兵も、味方に招き入るゝこそ、軍法の、もとと聞く。まして聟の甘輝は一城の主、一方の大將これを味方に頼むこと、大方にて成るべきか、心ををさめ、案内せよと制すれば、

和藤内門外に大音上げ、吳常軍甘輝公に直談申したき事有り、開門々々と叩きしは城中響くばかりなり。當番の兵士聲々に、主君甘輝公は大王の召によつて、昨日より出仕ありいつ御歸りも計られず。御留守といひ夜中といひ、何者なれば直談とは推參至極。いふ事あらばそれから申せ、御歸りの節披露して取らすべしとぞ呼ばはりける。一官小聲になりいや人傳に申す事ならず、甘輝公の留守ならば御内室の女性へ直に逢うて申すべし、日本より渡りし者と申せば合點のある筈と云ひも果てぬに城中騷ぎ、我々さへ面も拜まぬ御臺所對面せんとは不敵者、殊に日本人とや、油斷するなと高提燈銅羅にやう鉢を打ち立て〳〵、塀の上には數多の兵鐵砲の筒先そろへ、石火矢はなして打ちみしやげ、火縄よ玉よとひしめきける。

奥へかくとや聞こえけん妻の女房樓門にかけ上がり、あゝ騷ぐな〳〵、聞き屆けて自らがそれよと聲をかくる迄、鐵砲放すな粗忽すな。なう〳〵門外の人々、吳常軍甘輝が妻錦祥女とは我が事、天下悉く韃靼の大王になびき、世に從ふ我が夫も大王の幕下に屬し、此の城を預り守り嚴しき折も折、夫の留守に女房に逢はんとは心得ずさりながら、日本とあれば懐かしゝ身の上を語られよ、聞かまほしやと云ふ中にも若しや我が親か、何故尋ね給ふぞと心許なさ雲踏さに、懐かしさも先き立つて兵共粗相すな、むさと鐵砲放すなと、心遣ひぞ道理なる。

一官も始めて見る娘の顔もおぼろ月、涙に曇る聲を上げ、粗忽の申事ながら、御身の父は大明の鄭芝龍、母は當座に空しくなり父は逆鱗被り、日本へ身退く其の時は二歳にて、親子名殘の憂き別かれ辨へなくとも乳母が噂、物語にも聞きつらん我れこそ父の鄭芝龍、日本肥前の國平戸の浦に年を經て、今の名は老一官、日本で儲けし弟は此の男、是れなるは今の母、密かに語り賴みたき事あつて、成り果てし此の姿恥を包まず來りしぞ、門を開かせたべかしと、染々くどく言葉の末、思ひ當たりて錦祥女扨は父かと飛び下りて、縋りつきたや顔見たや心は千々に亂るれど、流石一城の主甘輝が妻、下々の見る處涙を抑へて一々覺えある事ながら、證據なくては胡亂なり。自らが父といふ、證據あらば聞かまほしと、いふより兵口々に證據々々、證據を出せ證據を出せ。ハテ親子といふより別に變はつた證據も無し。そりや

曲者よと鐵砲の筒先、一度にはらりと突つかくる。和藤内かけ隔て、無用の鐵砲ぼんともいはせば撫で斬りにして呉れん。いやしやつめとも遁すなと火蓋を切つて取り圍み、證據々々と責めかけて、既に危く見えけるが、一官兩手を上げてあゝ是れ〳〵、證據はそつちにある筈、一年唐土を立ち退く時、成人の後形見にせよと、我が形を繪にうつし乳母に預けおきつるが、老の姿はかはるとも面影殘る繪に合はせ、疑ひを晴れ給へなう其の詞がはや證據と、肌に離さぬ姿繪を高欄に押し開き、柄付の鏡取り出だし月にうつろふ父の顏、鏡の面に近々と寫し取つて引きくらべ、引き合はせてよく〳〵見れば繪にとどめしは古の、顏も艶ある緣の鬢鏡は今の老いやつれ、頭の雪とかはれども變はらで殘る面影の、目元口元そのまゝに我が影にもさも似たり。父方讓りの額のほくろ親子の印疑ひなし。扨は誠の父上か。なう懷しや戀しや母は冥土の苔の下、日本とやらんに父上有りとばかりにて、便りを聞かん知邊もなく、東のはてと聞くからに、明くれば朝日を父ぞと拜み、暮るれば世界の圖を開き是れは唐土これは日本、父は爰にましますよと繪圖では近いやうなれど、三千餘里のあなたとや此の世の對面思ひたえ、もしや冥途で逢ふ事もと死なぬ先から來世を待ち、歎きくらし泣き明かし二十年の夜晝は我が身さへつらかりしよう生きてゐて下さつて父を拜む難有やと聲も惜まぬ嬉し泣き。一官は咽せ返り樓門に縋りつき、見上ぐれば見下ろして、心餘りて詞なく、盡きぬ、涙ぞあはれなる。武勇にはやる和藤內母諸共に伏し沈めば、心なき兵もこぼす涙に鐵砲の、火繩もしめるばかりなり。（句讀は語り本による）

講釋

近松門左衞門が、正保五年竹本座の爲めに書いた時代物淨瑠璃の名作『國姓爺戰合』の中の名高い一部である。

此の作一篇の筋は、明朝の叛將李蹈天が韃靼に通じて大明を亡ぼした。その結果、明の遺臣吳三桂は皇子を抱いて九仙山に隱れる、そして皇子の姉君梅檀皇女は舟に乘つて日本に渡り、九州平戸の浦に打上げられて、漁夫和藤內夫婦に救はれた。和藤內は明の遺臣鄭芝龍一官と日本婦人

との間に生れた智勇無双の英雄兒である。和藤内は皇女をその妻に預け、明朝の恢復を計らうとして、父と母と親子三人唐土に渡つたが、先づ千里が竹林で、韃靼の兵と戰つてこれを降參させた。かくして唐土に渡つて、わづかな手兵は得たものの、扨困つたのは歴とした味方と根城とが無いことであつた。思案の結果、ふと思ひ出したのは、昔一官が日本へ逃げる時に、後に遺して來た錦祥女といふ娘が、今與常軍甘輝といふ大身の名將が妻となつてゐることで、早速親子三人連れ立つて、甘輝の居城たる獅子が城へと尋ねて行く。それからが此の本文にある通りで、折しも甘輝が不在なので、然らば娘に逢ひたいといふ。錦祥女はやがて樓門の上に立ち現はれる。ここで樓門の上と下とで親子兄弟不思議の對面を遂げたが、甘輝に祕密の賴みがあるといふので、先づ母を人質として城内に入れ、男二人は樓門の前で甘輝の歸城を待つ。援助の賴みが首尾よく聞かれゝば川水に白粉を流さう、首尾惡ければ紅を流さうといふ約束で。やがて甘輝が歸り、母は繩にかゝつたまゝ、甘輝に面會して援助を賴み入れたが、彼れは妻の緣に引かれて味方することを喜ばなかつた。やがて紅が流される。和藤内は城内に躍り入つて甘輝に迫ると、錦祥女が胸をひろげ、血に染んだ乳の下を見せて、紅の流れの源はとゝだといふ。一同はあつと驚いたが、甘輝はやがて妻の眞心に感じて味方を誓ふ。母はやがて義理の娘に殉じて刄に伏す。それより甘輝、和藤内は呉三桂と力を協せて、幾多の苦戰快戰の後、首尾よく韃靼王や李蹈天を誅伐して、明の國運を恢復する、といふのである。

場所が日本支那の兩國に跨つて、構圖が大きく、變化に富み、それに義理人情の葛藤を可なり自然に、同時に美しく賑やかに開展しつゝ、其の間に我が國民性を發揚したので、未曾有の大當りを占め、三年越し十七ケ月間打通したと傳へられる。

近松門左衛門――此の作者名で知られた文豪は、本姓を杉森といひ、名を信盛、通稱を平馬と云つた。他に巢林子、平安堂、不移山人、日一具足居士など、いろ〳〵の稱はあるが、一番の通り名は近松門左衛門で、次ぎに巢林子である。彼れの出生地には出雲國大原郡近松村、三河國、肥前國唐津、周防國山口、近江國三井寺の近松寺、越前、北國、長州大津郡、長州萩、京都等、いろ〳〵の說があるが、萩、京都の二つが最も有力で、殊に京都が一番尤もらしいと云はれる。

彼れの父を信義と云つた。信義は越前宰相松平忠昌に仕へ、後に浪人して京都に住んだ。近松は此の信義の二男で、初め一條禪閤惠觀（昭良）に仕へ、後辭して近江の近松寺に學んだ。その處女作は『花山院后諍』で、此の作を出した寛文十二年、卽ち二十歳の時を以て、彼れは作者生活に入つたと推定される。それより、彼れは當時京阪淨瑠璃界の名手である井上播磨掾、山本

土佐掾、宇治加賀掾等のために淨瑠璃を作り、殊に加賀掾のために多くの作を提供し、その傍ら歌舞伎の脚本をも作つた。彼れが特に厚意を寄せたのは淨瑠璃界の革命的麒麟兒竹本義太夫で、その乞によつて書きおろした『出世景清』を始めとして、彼れが著名の傑作は多く義太夫のために書いたものである。彼れはまた上方劇壇當代の名優坂田藤十郎のために歌舞伎の脚本をも作つたが、藤十郎の死後は殆んど此の方面に筆を執らなかつた。彼れの淨瑠璃は大體時代物、世話物の二種に分類される。時代物は過去の歴史上のおもだたしい人物、事件を取扱つたもの、世話物は當世の人情話、主として市井の男女の心中を取扱つたものである。即ち世話物は大體心中物と云つてもよいのであるが、これは、多少の萠芽は前代にもあつたものの、大體近松の創始にかゝるもので、元祿十六年に出した『曾根崎心中』を以て其の嚆矢とする。而して彼れの世話物は曾根崎以下、『天の網島』『冥途の飛脚』『女殺油の地獄』『宵庚申』など、すべて二十四篇、その悉くが揃つて立派な傑作と稱せられる。時代物は世話物を除いた全部で、これは大體叙事詩的の筋本位、賑やか本位のものであり、文學的價値に於いては、概して世話物に及ばぬが、その中では此の章を含んだ『國姓爺合戰』を隨一として、『曾我會稽山』と『雪女五枚羽子板』とが、世に「三傑作」と稱せられてゐる。故黑木勘藏氏の研究によると、近松の作者生活は五十三年、その間に少なくとも百十篇の淨瑠璃と二十八篇の歌舞伎脚本とを書いたといふことである。

彼れは初め京都に住んでゐたが、寛永二年五十二歳の時、竹田出雲のために竹本座の座附作者となつて大阪に移つた。それから專ら、竹本座のために新作を出だし、正德四年九月竹本筑後掾（義太夫）歿後も、その後繼者のために名篇を提供した。彼れが最後の作は享保九年の正月に出した時代物『關八州繋馬』で、その年の冬十一月二十二日を以て長逝した。享年七十二。戒名を阿耨院穆矣日一具足居士と云つた。

【仁ある君も……】　原作『國姓爺合戰』第三段の冒頭である。出典は關根正直博士の調べ出された通り、曹植の文によつたので、それをわざと前後させ、和らげて、解りよくしたのであらう。例の冒頭を物々しく立派に飾つて、文章に品位を附ける爲めの格言引用で、引き離しての意義は明瞭であるが、どういふ趣意で引いたかははつきりしない。詳しくいふと、內容の本筋に對して如何なる繋ぎをつけるつもりであるかが、はつきりしない。先づ君臣關係の方からいふと、此の段のおもなる人物、殊に主取りをして其の主に離れるといふ、特別なる事情を持つた鄭芝龍、甘輝の二人について見ると、仁君に對する無用の臣どころか、寧ろ「忠臣も不仁の君には仕ふる能はず」といふ意味の格言を引きたい位である。親子の關係も同じ事で、老一官

に對する國姓爺、老一官夫婦に對する錦祥女、いづれも有益有爲の子達であり、また義理人情を盡くした美しい關係で、慈父に對する無益の子といふやうな傾向の片影をも見せてゐない。かた〳〵此の格言と內容の事實との關係は、極めて空疎な、しつくりしないもので、大作家たる老近松が之れを引いた趣意は理解しかねるが、或は唯だ君臣、父子の仲らひに緣のある古語を引かうといふ位の考で取つたものでもあらうか。或は古淨瑠璃に於ける冒頭の常文句たる「さる程にさても其の後」が、極り文句を用ゐるといふ以外に何等の意味もなく、無關係なあらゆる事柄に冠らされたと同じ意味で、漠然と立派さうな古言が用ゐられたのでもあらうか。或は赤壁の麓で親子三人が逢ふといふ所から、ふと聯想して赤壁で戰つた曹操の子曹植の文章を取つたのでもあらうか。とにかく內容の本義に對する妥當な古言とは思はれないので、直言して識者の敎を乞ひたいと思ふのである。

因みに、古淨瑠璃に於ける冒頭に最も普通なる形式の一つは、「さる程に扨も其の後」といふ文句を置く事と、もう一つは昔の格言や詩歌などを引く事とであつた。此の『國姓爺合戰』五段の中、四段までは悉く古語の引用で冒頭を飾つてゐる。

【大和唐土さま〳〵に道の巷は……】「ちまた」は道股で、道路の股になつて分かれる分岐點なる辻のこと。この「道の巷」は、修身處世の道義の道と、歩み辿る道路の道と、卽ち無形有形兩方の意義を兼ねた一筆双叙の味で、我が國と支那とでは、人倫道德の道も別なり、又歩み辿る道路も別々に分かれてゐるがといふこと。差し當たつての本義は、始めて來た外國唐土の、迷ひ易く分岐した道ではあり、非常亂世の正しく身を處し難き折ではあつたけれども、忠孝誠實の義人達には、おのづから神の加護があつて、處世の分別にも迷はず、道路にも迷はずして、其處で落ち會はうと兼ねて約束した遠い〳〵赤壁山の麓に、不思議にも首尾よく辿りついたといふのである。これ丈の意義と趣味とを、此の簡單な文句に美しく含まして居る老近松の文才を歎稱すべきであらう。同時に吾等の母國語、やまと詞の偉力をも味はふべきであらう。

【赤壁山】支那湖北省武昌府嘉魚縣の西七十里、揚子江岸にある山、三國誌の古戰場として名高い處、又蘇東坡の前赤壁賦、後赤壁賦の二名作によつて、風流境として名高い處。此の赤壁の勝地は、湖北省黃州府城の西北漢川門外にあつて赤鼻山ともいふ。

【親子三人】一官と和藤內とその母親。

【吳常軍甘輝】明の吳常軍散騎將軍で、獅子が城の主である。妻の錦祥女が義を重んじ自殺するに及んで大義に歸し、國姓爺等と共に逆臣李蹈天及び韃靼の兵と戰ひ、李蹈天を殺し韃靼兵を

驅逐した。この甘輝は實在の人物で、鄭成功の股肱となり、その畫策に參して功多く、大擧して南京を攻め、瓜州を破り鎭江を取つて金陵に至つたが、淸將梁化鳳と戰ひ敗れて捕へられ、屈しないで遂に殺された。獅子が城は假作の名であらうといふことである。

【鯢魚】伊勢の海に棲息し、頭は虎に似て背に鋭い刺があるといはれる海獸。昔からその形を摸して宮殿、樓門などの棟の端につけた。こゝもそれである。

【石壘】セキルヰ石のとりで。

【繩を引く】眞直に長ぐつゞいてゐる樣の形容。

【黃河】揚子江に次いで支那第二の大河。源を靑海に發し、甘肅省に入り、湖南、山東の二省を貫流して渤海に注ぐ。全長二千五百哩。

【聞きしにまさる要害は……】「要害」は味方に必要にして、敵に有害なる位置構造のこと。「冴え返る春の夜の」は、一旦暖かき春になりながら、またぶり返して、冬らしき寒さが鋭敏に感ぜられる霜夜の凄さといふ意。大意は、かねて險に據つた要害堅固の名城とは聞いてゐたが、目のあたり見れば噂以上、想像以上のすばらしい構へで、しかも其の城廓の樣子は、一旦春になりながら、料峭と身に沁む春夜の寒さに霜が置いて、軒の瓦がきら〳〵と物凄く光つて居る。

殊に名城の堂々たる品位を見せて居るのは、棟先の兩端なる鯢魚で、その天空に尾を揚げて反りかへつた有樣は、天つ御空に鰭ふる如く、冴えわたる星空に冲つて仰がれ、地についた方の莊嚴美では、大石を積み重ねた壘壁の、イヤ高いこと高いこと！　それから其の城壁をめぐる堀の水の深く湛へた藍の色が、繩のやうに長く遙かにつゞいて、其の末端の大黃河に落ち合ふ構圖の大きさ！　上下四方の是等の要害や莊嚴美を領しつゝ、入口の樓門が、錠をおろされて物凄く靜まり返つて立つて居る。と、長く云へばかういふ味だが、それを七五本位の名調子で、簡潔に美しく暗示した面白さ。かういふ處が近松の文章の絕妙なる一面だが、

やまともろこし　さま〳〵に、（七五）
みちのちまたは　わかるれど」（七五）

聞きしにまさる　えうがいは、（七五）
まだ冴えかへる　はるの夜の」（七五）

といふ風に、七五の調子を中心根幹として、その間々に、

しもにきらめく　のきのかはら、（七六）
せきるゐたかく　つきあげたり、（七六）

ほりのみづあゐに似て　なはを引くかごとく、（十九）

の如く、七六、十九といふが如き、いろ〳〵の違つた調子を交へて、リズムに變化を與へ、變化を與へつゝ、其の間にヴライティを蹈まへたユニテイの大統一味を見せてゐる所、實に無類の面白さで、他のあらゆる淨瑠璃作者の企て及ばぬ所であつた。こゝなどはホンの序の口で、言ふにも足らぬ所であるが、之れを頭に入れておいて、後の樓門のくどきのあたり、「一官兩手をあげて、あゝこれ〳〵」のあたりを、ようく讀み味はつて下さい。「鯢魚天に鰭ふりて」など、鑄物の鯢魚に命を吹き込んだ天才のすばらしい筆力、何といふ面白さであらう。

【銅羅】ドラ。樂器の一種。からかねで作り盤狀をなし、ばちでうち鳴らすもの。多く佛家に用ゐられる。

【箭窓】矢狹間とも書く。狹間は城の櫓、塀等にあけて、そこより外面を望み、又は鐵砲や矢を放つに便したる窓。矢を射る狹間の意で矢狹間といつた。幅五六寸、長さ二尺の長方形の孔である。

【弩】昔、石を彈き飛ばして敵兵を斃すに用ゐた武器。

【石火矢】昔の兵器、今の大砲の前身ともいふべきもので、專ら攻城に用ゐた。彈は初めは石を用ゐたが、後には鐵や鉛を用ゐた。

【和國】日本のこと。支那に乘り込んでの記事なので、わざとかういふ音讀式の詞をつかはしたのであらう。

【如何は、せんとぞさゝやきける。和藤內】「いかゞは」で句讀を切つたのは、淨瑠璃の節を面白くする爲めの工夫である。讀み方、謠ひ方、語り方、話し方を面白くする工夫に、わざと文法の常軌をはづして、文法的には切るべき所をつゞけ、文法的にはつゞくべき所を切る一つの方法がある。謠曲、淨瑠璃を始め、あらゆる歌謠、辯說にして、凡そ藝術的の表現をしようとするものに、此の種の味を試みぬものはない。此の近松の一章も、其の方面の味を示すために、わざと語り本そのまゝの句讀を存したのである。たゞ「せんとぞ囁きける」と云つて、誰れにさゝやいたと書かないのは、すぐ次ぎに「和藤內聞きもあへず」とあるから、わざと前に省略した簡潔の筆である。

【和藤內】ワトウナイ。鄭芝龍一官の子。明國の滅亡を聞き、肥前平戸より父と共に明に航し、獅子が城の主甘輝等と結んで軍を起こし、進んで五十餘城を拔き、更に吳三桂等と共に南京城に迫り、李蹈天を捕へて酷刑に處し、韃靼王を擊退して永曆帝を立てた。近松の作『國姓爺後

日合戰』には、國姓爺日本風を好み、後甘輝に意見せられ、怒つて甘輝と絶つて官を辭し、東寧島に去つて島主となつた。その後甘輝が永曆帝を伴つて國姓爺の城門に來るに及び、甘輝と和して永曆帝を保護し、韃靼軍の來襲を擊破したと書いてある。

【親しみだてして】「だて」は「立たせ」のつまつたので、めかすの意。懇意めかし、親しさの押賣をして、といふのである。

【不覺を取らんより賴まれうか賴まれぬか一口商ひ】 興奮した心持の句を、力强く一氣に讀みつづける味はひで、長文句をわざと句讀なしにしたのであるが、勇み肌の張り切つた心持が、躍るやうに氣持よく現はれてゐる。「一口商ひ」「卽座の敵」「行逢姉」「賴まれぬ心底」は、普通ならば働き詞を添へて、「一口商ひを試みん」「卽座の敵となる迄なり」「行逢姉たるに過ぎず」「賴まれぬ心底有難からず」などいふべき處を、わざと名詞止めにして、簡潔な力强い味を見せたので、淨瑠璃文に於いて一つの型をなし、歌舞伎の脚本などに於いて頻りに用ゐられるやうになつた一種特別の修辭である。特に注意して、歌舞伎劇の文章などを味はへる折の栞にしたいと思ふ。「不覺」は不覺悟の意で、「不覺を取る」は認識不足で油斷して失敗すると。「一口商ひ」は諾否の返事を商賣に譬へた隱喩で、買ふか、買はぬか、否か、應か、附屬の文句なしに、一言で極めろといふこと。卽座の敵は、一語を放つ、その一刻に敵となること。「行逢姉」は面白い詞だが、前から兄弟と知つて懇意につき合つてゐたのではなく、偶然ぶつかり合つて姉と知つたといふ、當座、出來合ひの淺い關係だといふこと。此の邊の詞、文句の活き〳〵して火花を發するばかりの活躍ぶりを味はひたい。

【日本の風も懷かしく】「胡馬北風に嘶く」などいふ支那の諺を、それとなく巧みに書きかへたのであらう。

【竹林の虎狩に從へし島夷】 此の作の前段に、和藤內は親の老一官夫婦と親子三人同船して唐土に着陸したが、物騷の折に怪まれじとて、老一官と和藤內母子の一組と、二手に分かれ、赤壁山下で落ち合はうと約束して急ぎ行く。扨和藤內は母を伴ひ行く程に、千里が竹といふ大竹藪に迷ひ入つた。暫らく行くと猛虎が一匹暴れ出でる、同時に敵李蹈天の部下共が虎狩りの一行に行き逢つて、奮鬪の結果、彼等を降參させ、日本名を與へて手下とした。その歸順した敵兵どもを「島夷」とは云つたのである。事實は島どころではない、支那大陸の兵卒共であるが、日本を本尊と見、支那を小國扱ひして、「島夷」とは罵り去つたのであらう。而してかういふ日本本位の大氣焰が、一つは此の作の大衆に悅ばれる一理由とはなつたのであらう。「元手」

は資本。

【なんの人頼み……犀の甘輝と一勝負と】　例の威勢を添へるための名詞止めで、普通ならば、「人頼みをなさん」「甘輝と一勝負せん」といふべき處を、下略した修辭の味である。

【心入】　注意の意を注ぐと同じ味で、特別に心をくばる親切心のこと。心を深入りさせて人の爲めを計るといふ意。

【胤一つ】　男系が同一、父が同じといふ意

【我が恥ばかりか日本の國の恥】　日本人の誇りを感じさせて、見物聴衆の血を湧かすべき文句である。

【韃靼】　ダッタン。清朝の發祥地、本據たる滿洲のこと。俗に滿洲を韃靼ともいひ、滿洲人を韃靼人ともいつた。事實、韃靼は明の北にある大國、今の蒙古の地であるが、江戸時代には、韃靼も滿洲も、皆同じものと視られてゐたのである。

【大義を思ひ立つからは、私の恥を捨て……一人の雑兵も、味方に招き入るいとそ、軍法の、もとと聞く】　普通文法的には、

大義を思ひ立つからは、……一人の雑兵も、味方に招き入るべきで、それが（……招き入るのが）軍法の本と聞く。

と書かねばならぬ所である。かやうな折返すべき處を、掛持にして一度で間に合はせるのが、括り書きともいふべきもので、古くいへば『古事記』以來、『源氏物語』『枕の草子』以來、許されて、廣く行はれた一種の修辭である。簡潔な味を出來す爲めの一種の許容文法ともいふべきものであらう。

【大方にて成るべきか】　並大抵の心得で出來るものか。

【心ををさめ案内せよ】　はやる心を押し鎮めて取次を乞ふがよい。

【開門々々と叩きしは】　「カイモン」は實に威勢の好い、幅のある、大きい、立派な詞で、此の場合、これ以上のよい詞はあるまいと思はれる。小泉八雲のラフカヂオ、ヘルン氏が書いた「耳無し法一」といふ怪談に、怪物が夜半盲人法一の門を叩く所を "Kaimon! Kaimon!" と呼んだと書いてある。八雲氏がどういふ心でさう書いたか、またその語をどうして思ひついたか知らないが、愚考には多分此の語が英語の "Open the gate!" などでは迚も現はし切れぬ力と味を持つてゐると思つた爲めであらう。かういふ事によつても、日本語（國語化された漢語をも含めて）にすばらしい趣味威力のあることが知られる。

【城中響く】城一ぱいに響きわたるといふこと。城中に響くといふとは味がちがふ。例の七五調だが、威勢のよい詞である。

【大王】韃靼の大王。

【推參至極】語義は目上の前へ、押しかけて行くといふこと。無禮至極の意。目上を訪問することを、謙遜して「推參した」といふこともあるが、こゝは無禮を極めた訪ね方といふ意味である。

【披露】ヒロウと讀む。披き露はす意で、文書の公開、ひろめ、上申等いろ〳〵の意に用ゐられるが、こゝは上申傳達の意。「取らす」は「くれる」といふ輕蔑の詞。

【人傳に】人を介して間接に。

【内室】貴人の妻の敬稱。

【御臺所】ミダイドコロ。臺盤所と同じく、食物臺なる臺盤を置く所。禁中では清涼殿の一室で女房の詰所をいひ、臣下の家では食物を調へる所をいふが、轉じて貴人の北の方の稱となつた。妻女が食物を調へることから來たのである。

【不敵者】もと勢猛にして敵すべからざる意で、「大膽不敵」などつらね、多く人を人とも思はぬ亂暴者のことをいふ。

【高提燈銅羅鐃鈸を打ち立て】銅羅、鐃鈸は共に樂器で、今日專ら佛家に用ゐられる。銅羅は銅又は紫銅で作り、形は金盥の如く、中央部に徑數寸の疣があつて、そこをばちにて打ち鳴らすもの。鐃鈸、假名で正しくは「ねうはち」と書く。響銅で作り、形は鍔廣の麥藁帽子の如く、二枚打ち合はせて響かしめるもの。高提燈は長い竿の先につけた提燈。夜の非常警戒に高提燈を掲げる我が國の風俗や、寺院で鳴らすドラ、ネウハチなどを思ひ浮かべて、好い加減に然るべく取り合はせた近松の才筆であらう。「打ち立て」は、高提燈をば「立て」で受け、ドラ、ネウハチをば「打ち」で受けたのであらう。文法的には少し變だが、讀み流す分にはさまで耳ざはりにはならぬやうに思はれる。縱横無盡に詞を使ひこなす大我儘大力倆者の老近松だ、その邊はどうでも宜しく、のつもりであらう、從つて吾々も自由に解釋してよからうと思ふ。

【うちみしやげ】「みしやぐ」は「ひしやぐ」に同じく、取りひしぐ事、叩きつぶすこと。ハ行マ行の通用である。

【妻の女房樓門にかけ上がり】「妻」はもと夫から婦を、婦から夫を、双方で呼んだ稱であつた

が、いつの間にか女の方のみをいふ事になつた。女房はもと室もちの身分ある女官の事、それが後に妻の意に用ゐられる樣になつたのである。こゝで重ねたのは、一つは調子の爲めでもあらうが、一つは女に品位をつける爲めで、初めの「妻」はたゞ「つれ合の妻君」といふ意味、「女房」は立派な品格を持つた女といふので、たとへば「夫の亭主」「むすめのお嬢樣」といふやうな味であらう。そして次ぎに使つた「夫の留守に女房に」の女房は、「妻たる者に」といふ改まつた意味であらう。「樓門」は二階作りにした門のこと。

【あゝ騷ぐな〳〵……なう〳〵門外の人々】　無駄なしに簡潔に書いてあるが、「あゝ騷ぐな」は味方の士卒を制する詞、「なう〳〵」は門外の老一官等に呼びかける詞。下手に書くと、「兵共に向つて」とか、「門外の人に向つて」とか、一々ことわつて書く所であるが、詞だけで相手の變はつた事をちやんと解るやうに書いた所がうまいのである。又一つには淨瑠璃や芝居の如き演劇ものでは、身振やセリフ廻しなどの謂はゆる科白で、そこを知らせるのが一つの呼吸なので、文章を簡單にして、義太夫語りや人形使ひに活動の餘地を與へたところが、作者の手腕で同時に思ひやりでもあるのである。

【逢はんとは心得ずさりながら】　文法的には「逢はんとは心得ず。」と切つて、改めて「さりながら」と出すべき所を、わざとつゞけたので、一種の藝術的なる讀み方、接離法の一つである。謠曲などにもよくあり、殊に、故市川團十郎などの得意とした臺詞まはしの一つであつた。

【雲蹈さに】　日本語の趣味と漢語の趣味とを一擧にして兩得せんとする詞姿の振假名式添義法。

【むさと】　みだりに、前後の見境もなく、うつかりと。安齋隨筆卷四に「俗に漫なる事をムサといふ。昔の詞には無左右といへり。左をも右をも思ひ量る事なくみだりなるを云ふなり。今は無の字を音に唱へて、無左右と云ふをムサトと云ふなり。又無左右といふを俗に誤りてムシャウとも云ふ」とある。むさのむが鼻にかゝる所からムザともいふ。そしてそれが「マザ〳〵ト」などに轉じたとも云はれる。

【一官も始めて見る娘の顏もおぼろ月、涙にくもる聲を上げ】　實に好い調子の名文である。初めの四句は、リズムの味を細かにいふと、一官も、はじめて見る、娘の顏も、朧月。五、六、七、五と七五本位に變化をつけた二十三字を悠揚(ゆうよう)と讀むので、その次ぎに

なみだにくもる　こゑをあげ
そこつのまをし　ごとながら

と、七五を刻んで追つて行く面白さ、そして複雜な事柄を簡潔に、しかも面白く解るやうに疊

み込んだ面白さ、まことに言語道斷ともいふべきであらう。季節や月日は淨瑠璃に普通な、例の極めて大まかであるが、前に「孕えかへる春の夜の」とあれば、いづれ餘寒の二月時分のつもりであらう。また朧なる光によつて娘の顏を仰ぎ見、月にうつる父の顏を、樓上から鏡の面に寫し取つたと趣向してある所を見ると、いづれ十五夜の前後の圓に近い月影の頃のつもりであらう。「曇る」は「おぼろ月」の縁語により、枕詞風に承けたので、始めて見る一人娘の顏だ、はつきり見たいと思ふのに、生憎と月が朧ろに曇つてゐる、情なさに老の眼が涙に曇る、聲までが曇りを帶びて、咽ぶやうな涙聲をふりしぼつて、扨いふことにといふ味である。さすが老手、技巧らしい厭味は微塵も見せてゐないが、此の「曇る」は月は空に曇り、目は涙に曇り、聲は悲みに曇る。この三つを含んでゐるので、一筆三叙の離れわざを見せてゐるのです。かういふ事を細かに言ふと、くだ〳〵しくなりますが、近松の文章は實に活殺自在、何の氣もなく書いて居つて、歩々春を生じ、咳唾珠を成すといふ趣があるのですからね。私が曾て調べたことである、修辭學で詞姿といふ修飾形式が三百種餘りもある、その數多き三百餘種の詞姿が殆んど悉く、近松が傑作の三四十篇から取つた例で立派に說明がつくのです。どうか、斯ういふ方面にもよく注意して、此の國の名譽を負うて立つ大天才兒の筆の妙趣を味はつてやつて下さい。

【逆鱗】　ゲキリン。天子の怒りのこと。韓非子の「說難」に「夫龍之爲蟲也、柔可狎而騎也。然其喉下有逆鱗徑尺。若人有嬰之者、則必殺人。人主亦有逆鱗、說者能無嬰人主之逆鱗、則幾矣。」とあるのに基く。

【成り果てし】　おちぶれはてた。賤しい者に成り成つた最後の果てが今の身だといふこと。

【恥を包まず】　恥をかくさず。人前に出られたわけではない、殊に、名將の人妻になつてゐる娘に、このまゝの姿で逢へる義理ではないが、據ろなく、其の恥かしさをむき出しにして來たのだといふのである。

【くどく】　口說くの略。繰り返して切に意中を訴へること。歎くこと。

【流石】　サスガ。しかすがの約。卽ちしかしながらの意。

【胡亂】　ウロン。此の字の廣東音(カントンオン)で、胡說亂道、えびすの滅茶言(めちやごと)といふやうな意味だといふ。怪しく合點のいかぬこと。

【ハテ】　サテの韻通で同義だが、接續詞で同時に感投詞の味を兼ねた詞。さて解らぬことを言ふ人達ぢや！　などいふ意を含んでゐるのであらう。

【はらり】ずらりなどに似てゐるが、今まで一つに纏まつてゐたのが、バラリと散開して列を成すといふ意であらう。

【いやしやつめとも】「いや、しやつめ共」である。しやつめはきやつめ、やつらと同じ。

【火蓋を切る】火蓋は鳥銃の名所で、火皿の火口を被ふ蓋。火蓋を開いて點火の用意をすることで、鐵砲を打つ用意をしたといふのである。轉じては仕事に着手することにもいふ。

【日本へ身退く＝其の時は二歳にて】「身退く」は謠曲『船辨慶』に『傳へ聞く陶朱公は……功成り名遂げて身退くは天の道と心得て……」とある、あれを思ひ出でたのであらう。尙ほ例の接離の關係の味をいふと、文法的には切るべき「身退く」で切らないで、わざとすぐに「其の時は二歳にて」とつゞけて、趣をつけたのである。それから

物語にも聞きつらん＝我れこそ

成り果てし此の姿＝恥を包まず

など、皆切るべき所をわざとつゞけたので、こんな處にも、藝術的な讀み方、語り方の味を知るべきである。

【證據あらば聞かまほしと、いふより兵口々に證據々々】親子のしんみりした話が是れから始まらうといふ處へ、雜兵どものかしましい差出口は、いかにも邪魔らしく見えるが、是れは場面を賑やかにする劇作家が技巧のあしらひで、同時に、窮して通ずる面白さを見せる爲めに、わざと、いろ〳〵な障碍物を出したのである。雜兵等が、女主君へ忠義立てして、「證據を出せ、證據を出せ」といふ。一官は「事實だから事實といふまで、外に證據は無い」と答へる。雜兵どもは「さてこそ曲者！」と鐵砲を突きつける。荒武者の和藤内が、腕をまくつて飛び出す。

「其奴をも一しよにやつつけろ」と逸る。せり合ひ揉み合ふその間に、一官の頭に天啓の如く閃いたのは、我れに在らずして、向うの娘の手に或はあらうかといふ、我が肖像である。かくして切羽つまつた鬪爭を、兩手でおし鎭めて、

あゝ是れ〳〵證據はそつちにある筈

と、調子までがゆつくりと落ちついて來る所が面白い。窮して通じた「活」の一路である。我れに求めた證據を、却つて向うの懐ろに見出だすといふ機轉の味で、同時に敵の刄で向うを刺す逆捩の味である。要するに、これまでのごた〳〵は此の一言を利かせる爲めに、わざと突發させ而して繼續させたので、かう見ると、近松の趣向といふものも、馬鹿に出來ぬもの、油斷なく氣をつけて味はゝねばならぬものでせう。此の「一官兩手をあげて」から最後の「火繩も

しめるばかりなり」までが、「樓門の場」と云つて、名文として、また名曲として、近松の作の中でも、特に名高い所です。

【兩手をあげてあゝこれ〳〵】「あげて」で切らずに續けた所が、例の接離の味。

【成人】セイジンと讀む。

【疑ひを晴れ給へ】「晴れ」は自他が違ふやうで變であるが、「晴ラセ」を約めたつもりで使つたのでもあらう。或は「疑ひが晴れるやうにしてたもれ」といふ心持を活かしたのでもあらう。一寸文法を超越した使ひざまである。「晴れ給へ」で切らずして、他人の詞にすぐつゞけて「なう其の詞」などは、此の場合の急な呼吸を實によく活かして現はしてゐる。

【月にうつろふ父の顏、鏡の面に近々と寫し取つて】これは無論繪空事で、有り得べき事ではない。實物を見てはつきりしない顏が、ガラスに寫して見たところで、何のはつきりしよう。鏡中の影と鏡との間には、鏡と正身の老一官との間と同じ距離があるべき道理で、そんな事をも知らぬたわいのない趣向のやうではあるが、かういふ處は理窟を拔きにして、むしろ情の味、又むしろ道理を超越した荒唐味、奇怪味を悅ぶべきであらう。例へば謠曲「鉢の木」の、生木をたいて暖を取る荒唐味のやうなものである。生き〳〵して綠を誇り、蕾を見せてゐる梅、松、櫻の生木をたいたとて、何の暖かからう、先づ第一にいぶるばかりで燃えまいぢやないかと云へば、尤もな理窟だが、理窟を離れて、祕藏の盆栽を犧牲にしてまで人をもてなす情合を味はへれば、やはり面白く味はへられるので、こんな事は、暫らく理性の鎌首を立てさせずに、うつとりとして、恍惚として見るべき處かと考へる。

【綠の鬢、鏡は今の老いやつれ】普通にいへば、肖像の方はつや〳〵しい黑い髮の毛を持つた壯年の父、鏡に映つた父は、老いさらばうたやつれ姿といふところだが、これを面白く言ひ換へたので、黑を似寄りの風情ある詞の綠にかへ、髮の毛を頭髮の中の或る部分の名である鬢にかへ、映つた姿をばその姿をうつして持つてゐる所の鏡で代表させたと云ふやうなわけで、細かにいふと、一々修辭上の技巧を見せてゐるのである。

【なう懷かしや戀しや＝母は冥土の苦の下】

【父は爰にましますよと＝繪圖では近いやうなれど】

【我が身さへつらかりし＝よう生きてゐて下さつて】

いづれも文法的に離すべき所を、わざとつゞけた藝術的な語り方の味である。「冥土の苦の下」は苦の下なる冥土、卽ち墓の下なるあの世の意、調子の爲めに詞をあちこちにしたのである。

この「なう懐かしや戀しや」から「聲も惜まぬ嬉し泣き」に至る迄、文句の轉じ方の面白さ、續き方の自然さ、それから又、「いや、不思議な事を云はせたな」と驚くと、それがすぐにピタリと落ちついて、クラリ〳〵と轉じては續きつゝ、動搖する感情を最高潮に運んで行く手振の絶妙さを御覽なさい。「母は死んで在さず」と云つて「父は日本にありとは聞くが」につゞく。それから日本は遠くて便りを聞かれぬが、東の果ての國と聞いて、明くる毎に東天の旭日を父と思つて拜むとつゞく。今度は「明くれば」から「暮るれば」につゞいて、「夜は世界の地圖を披く」は、思ひかけない奇拔だが、さて圖の上を指點して、是れは我が居る鄕國唐土、右に離れた島つゞきは、亡命の父います日出づる國の大日本と、かういへば文句も思想もピタリと落ちついて、奇拔だと驚いたのが可笑しい位。今度は父の國の遠さに、「現世の對面は絶望し」と云つて、「いつそ來世で逢はう」とつゞく。面白いなと思ふと、更に上を越して「死なぬ中から來世を待つ」などは、奇拔であり、自然でもあり、誠に言語に絶した面白さで、扨「かゝる悲歎の二十年は、故國に在り名將の妻ともなつた私でさへつらかつたに」から「遠い異國に亡命の老の御身のつらさはさぞ」とつゞいて、さて「其の艱苦に堪へ忍んで、よう生きてゐて下さつて」の接續は更に面白い。「そのために父が拜める私のうれしさ」の轉じ方は、更に〳〵面白い。かくして事が窮まる、同時に文句も極まる。あとは言語道斷の嗚咽感泣があるばかり。女主人公の錦祥女が聲を惜まず泣く、而してその泣きは嬉し泣きであつた。讀者觀衆もその嬉し泣きを貰ひ泣くであらう。此の、內容と文句とが步調を合はせ、正奇のあしらひが一つになつて、美しい感情世界を繪よりも美しく見せてゐる面白さを味はつて下さい。我が老近松の爲めに、我が元祿文學の爲めに。

【心餘りて詞なく、盡きぬ、涙ぞあはれなる】「盡きぬ」で切つたのは、例の餘意を殘す藝術的表現のためで、舞臺ならば、こゝで一種の三絃の手が入つて、特別な味を見せる所である。序ながら、淨瑠璃は唯だ文章を文章として讀むものではなく、三味の音に合はせ、人形の振りに合はせつゝ、一種の調子で語られるものである。謠曲が能舞臺の上で、面を冠り裝束を着けた役者が、大鼓、小鼓、太鼓、笛に合はせて、舞を奏しつゝ謠ふもの、卽ち建築、彫刻、繪畫、音樂、舞踊及び文章の六大藝術から成る綜合藝術の一部であるやうに、淨瑠璃は三絃と人形と文章との三位一體の藝術である。從つて、その文章を仔細に味はへるには、人形の樣子、三味の音色を、いくらかでも想像しつゝ、讀まねばならぬので、こゝに謂ふ「盡きぬ、涙ぞあはれなる」などいふ續け方、切り方の趣なども、多少さういふ方面を聯想しつゝ鑑賞したいものであ

ると思ふ。

【こぼす涙に鐵砲の、火縄もしめるばかりなり】「火縄もしめる」などは此の場らしくて非常に面白い。また筋を運んで來た最後の結末としては、この主要感情の現はれなる「嬉し泣き」を中心として、あらゆる人物の心が統一された所が面白く、「燃ゆる火縄もしめるばかり」といふ有形の譬喩に於いて、のぼせ上がり、はやり立つた壯夫雜兵等の熱情迄が、しんみりとなつた心持の象徴された所が、非常に相應はしくて面白い。

〔批　評〕以上「釋義」の中で、内容形式の兩方面にわたり、批評は可なりに盡くしてあるが、試みに二三の追加をする。

此の一章は、『國姓爺合戦』といふ大きな組織を持つた偶人劇詩の詞章の一部で、引き離して、組織や段落を論ずべきものではないが、假りにこれだけを一つの作として見ると、内容の性質からは、獅子が城に着く迄の一段と、着いて後なる樓門の問答活劇の一段とに分かつべきであらう。けれども常識的に大體の趣味からいふと、四段に分けるのが穩當かと思はれる。

さう見ると、その第一段は、冒頭の格言から城に着くまでの括り書きである。第二段は、城の要害の描寫から、城外に於ける老一官夫婦、和藤内、親子三人の相談の條で、「城中響くばかりなり」までを其の中に攝すべきであらう。先づ父の老一官が、すばらしい要害と旅にやつれた親子三人の淋しい影との對照に、悄然として絶望の詞を投げると、子の和藤内がいきり立つて、これ式の城一つぶしと躍り出でる。母がこれを止めて、女の嗜み、國の恥、大義を思ひ立つ大將の心得を說き聞かせる。和藤内が之れに從つて城中に案内する。かくして城内との交渉が始まるのであるが、三人に對する仕事の割り當て、卽ち三人それ〴〵の働かせ振りは、役不足もなく、變化もあつて、實に申分なしといふべきであらう。

第三段は、城の内外の交渉談判の條で、「當番の兵士聲々に」から、「既に危く見えけるが」まで、最後のしんみりした靜的光景を出す爲めの準備ともいふべき、動的光景の描寫の條である。和藤内が開門の要求に憤慨して番兵が推參呼ばはりをする。老一官が、さらば娘に逢ひたいと柔らかにいふと、更に怪しんで、火縄よ丸よと騒ぐ。そこへ娘の錦祥女が樓門に現はれ、彼れを制し、これをなだめて、門外なる訪客の身の上を問ふ。父が打明ける。娘は思ひ當たりながら、念の爲めに證據はと求める。父は無いといふ。兵どもが又ひしめき騒ぐ。和藤内は又飛び出したが、今度の留め役は母ではなくて父であつた、といふのである。澤山の人物を實によく働かして、賑かに筋を進めて居るが、こゝで殊に面白いのは、前にも云つた通り證據を求

め、鐵砲騷ぎをさせ、證據の無いのに窮させ、腕をまくつて飛び出させるといふ、目まぐるしいバタ〳〵騷ぎの波爛重疊の後に、窮して通じさせた趣で、更に面白いのは、彼れから要められた證據によつて活路を開いたこと、前には逸る和藤内を母が制したのに對して、今度は和藤内と番兵との間の危機を目の前に見つゝ、それには構はず、「あゝとれ〳〵」と、樓門の上に呼びかけて事を靜めた意表、變化の趣向であらう。同時にかういふ天晴れの趣向が構へられて居りながら、それが少しも目立たずして、唯だ有るべき事が有つたやうに考へ做される所が、近松の趣向まけせぬ一種の偉さを見せるものであらう。

第四段は、殘餘の全部、動的活劇を見せた後の靜的耽味の部分で、一章の中心興味である。先づ父が預けておいた肖像によつて疑ひを晴らせといふ。

晴れ給へ〻なう其の詞

父の詞に引きつゞけて、（句讀も切りあへず）其の御詞がもう證據だと云つて、袂繪を開く。こゝに理窟を超越した切々の情が、それからそれへと展開して、嬉し泣きを惜しまず泣く。老一官も泣く、和藤内も泣く。無論母も泣く。心なき兵共も泣く。火繩までが泣くばかり。……しんみりと抑へて、鎮めて、統一した所、うまいものではありませんか。

釋義以來、これまで述べて來たのは、主として詞遣や文章の味、趣向の味、人物描寫、劇的取扱の味などであるが、近松を讀むに當たつて特に注意したい事は、彼れの作が淨瑠璃文學の最高峰を示してゐる事、彼れが在來の淨瑠璃の精を採り、更に前代古文學の粹を集めて、昔の大古典『萬葉集』や『源氏物語』や『平家物語』や謠曲やと雄を競ふべき大文學を創造した事である。もう一つ特に注意して味はひたい事は、武家時代以來長く久しく抑へつけられてゐた國民の感情生活が、元祿時代に至つて、猛然として擡頭した、その感情本位の時代相が燃え立つやうに彼れの作の上に現はれてゐることである。此の消息は寧ろ特に彼れの世話物について言ふべき事で、時代物にはまだ十分に現はし切らない趣もあるが、しかしながら、思ひ内にあれば色外に顯はるで、和藤内が身内（みうち）に燃えさかる熾烈の情を叫びのけ、やつてのける處、錦祥女が親戀しの情を、詞をつくして身も世もあらぬばかり言ひつくす所などに、此の時代相の片鱗を見出だすことが出來るであらう。尙ほまた同じく元祿の子と生れながら、此の花やかな世相に眼を閉ぢ背を向けて、琵琶湖畔の石山の奥に幻の住居をひつそりと樂しんだ芭蕉の作に現はれた趣味と相對して、近松の作がどれほど異（ちが）つた趣を見せてゐるか、異（ちが）ひながらまた（も）そこにどれほどの共通味を見せてゐるか、これも吾々に特別の興味を見出ださせる問題であらうと思ふ。

第十四　眞書太閤記とは何ぞ

一

一

『眞書太閤記』は豐太閤の資料集大成ともいふべきもので、あらゆる太閤記中の白眉である。

豐太閤は日本の生んだ偉人中の偉人であつた。明治四十年のことである。米國ニューヨークのブルックリン・インスチチューションから、我が國史中の最大偉人七名の選定を依頼してことがあつた。それは歴史、法制、文化といふ三標準から見ての最大偉人七名を知つて記念したいといふのであつたが、朝野の名士百數十人＝吾等の記憶に殘つて居る人の中、物故した主なる數者を擧げると、伊藤博文、山縣有朋、大隈重信、久米邦武、坪内雄藏、吉田東伍、星野恒、坪井九馬三氏等があつた＝から、理由附記の投票を得た結果は、神武天皇、聖德太子、弘法大師、紫式部、源頼朝、豐臣秀吉、德川家康の七人と定まつた。かくして明治四十年代の知識階級上層の心眼に映じた最大偉人七人の中に、頼朝、秀吉、家康の三武將が肩を比べることになつたのであるが、三人の中で、大多數の國民に取つて、その非凡なる姿の最も雄偉に感ぜられるのは、恐らく日吉丸、木下藤吉郎、豐臣秀吉、豐太閤、豐國大明神等、いろ〳〵の名によつて親しまれ、敬はれる秀吉その人であらう。

とにかく豐臣秀吉は、常識的に日本の生んだ最も偉大なる武將であつた。彼れの功業は在世當時から死後にかけて數多き公私の文献に傳へられ、江戸時代に入つても、德川幕府から嚴しい壓迫を受けたにかゝはらず、猶ほ少なからぬ長篇の文學に謳歌されたが、それらの文献の中で、最も長く、最も具はつて、且つ最も面白いものは『眞書太閤記』である。

『眞書太閤記』は一面豐太閤の傳記であり、一面太閤時代の日本史であり、また一面半世紀にわたる日本の戰記である。吾等は左に、此の三拍子を具備した十二編、三百六十卷の大作が、いかにして出來たか、如何なる興味と價値とを持つてゐるかについて、極めたる概略を語るであらう。

二

豐臣秀吉に關する文献は、正續の『群書類從』及び『史籍集覽』に於いて、『太閤素生記』『賤嶽合戰記』『惟任退治記』『柴田退治記』『余吾物語』『豐臣記』その他可なり多くを見ることが出來るが、かれらの外にも、他の武家や、文人や、僧侶や、茶人やの日記などの中に多くを見出だすことが出來るであらう。かれらの中には、或は『素生記』の如く、町村役場の戸籍謄本さがひ

の片々たる數葉のものもあつたであらう。或は秀吉に昵近した大村由己が天正十一年に書いたといふ『柴田退治記』に、

其後成二昔語一、閑然而少眠程、半天聞二杜鵑音信一

さらぬだにうち寢る程も夏の夜の
夢路をさそふ時鳥かな（小谷御方）

夏の夜の夢路はかなき跡の名を
雲ゐにあげよ山郭公（勝家）

如レ此讀二替心程可二想像一。秀吉從二寅一點一相二揃諸卒一攻二入城中一。於二乙丸一夜中之合戰、伏レ屍者、被レ疵者、如レ泥レ沙、流血漂レ楯。

とあるが如き、不思議な漢和の織交もあつたであらう。或は最後に「越前にての次第、委しくは不レ奉レ存候故、一つ書き仕り差上申候」と斷書のしてあるのを見ると、天正十一年勝家の滅亡早々に何人かが書いたと思はれる『賤ヶ嶽合戰記』に、

秀吉御覽じ、時分は今成るぞ、かゝれや兵共とて、自ら貝を取り吹きならし給へば、黑烟を立てゝ突きかゝる。清水にて山路將監、一備へ持ちかためけるを、加藤虎之助突き崩し、將監と引くみ、山より五反計り、兩人ともに組みながら落ちけれども、互に放し申さず、終に將監組みまけ、虎之助、將監が首を取る。

と云ふが如き、磨かれざる迫力を持つた、筋骨の逞しい文章もあつたであらう。或は博多の貿易商にして茶人なる神屋宗湛の『宗湛日記』に見る、

「筑紫の坊主どれぞ。殘りの者はのけて、筑紫の坊主によく見せよ」との御諚に候。
「かわいや、遲く上りたるよな。やがて茶を飲ませうぞよ」と御意成され候。忝くと申上候也。

といふが如き秀吉の親しみ詞を、そのまゝ寫實した文獻もあつたであらう。けれども彼等は秀吉の一生に取り、また秀吉その人に取つては、ほんの一時に於ける一面の斷片に過ぎなかつた。またその表現もまち〳〵で、また多くは稚拙で、我れ勝手で、纏まつた組織のある作を成すに堪へぬものであつた。かやうな境涯をいくらか脫して、最初に此の非凡兒の一生にわたる面目を取纏めて現はさうとしたのは、『川角太閤記』であつたであらう。

三

『川角太閤記』五卷は、黑川春村、同眞賴父子の說によると、西川原角左衞門の筆に成り、元和六年（一六二〇）以後に成つたものであるらしい。隨つて川角は世に「カハヅノ」「カハズミ」或は

「カハカド」と讀まれて居るが、姓名の一字づつを取り連ねた略稱で、「カワカク」と讀むのが正しいのであらう。人に尋ねられて答へたのか、或は、わざと答問體の形式に書いたのかは明らかでないが、大體候式の敬相によつて、多年の見聞を斷片的に濟しくづしに書き並べて、太閤の一生をざつと取纒めようとしたものらしい。人については、「太閤樣天下御取候て後」「信長公云々」「家康卿」「明智殿」といひ、事を寫しては、多くは

信長公甲斐國武田の四郎勝頼を御追討の其の爲めに、江州安土の御城より御馬を被出候。

家康卿は同年五月十五日安土に至りて御着被成候事。

の如き、改まり過ぎた、味の無いものであるが、時々はあどけない筆致の中に、武人の魂の健氣な現はれを見せた所もある。例へば明智光春の湖水渡りを寫して

彌平次心に思ふ樣、此の馬逸物なりといへども、安土山より乘り出したる馬なれば、はや疲れなん。かんよき馬は、乘殺すまで草臥れたるけしき見えぬものなれば、是れよりまた急に乘るならば、一度屏風返しに、ひッたとや斃るべきなれば、敵三町程近付いて、鞍壺へ直るべきと定め、息合を取出し、ゆる〳〵と飼ひ、馬の息をつがす。

と云ひたる、或は、秀吉が小田原陣をうち揚げて鎌倉見物の折に、頼朝の像と相對した所を寫して、

鎌倉被成御見物、則若宮八幡へ御立寄被成候時、社人御戸を開き申候へば、左に頼朝の木像あるを御覽付けられ、御言葉には、頼朝には天下友達に候よ。あひしらひ（待遇）等閑に仕るべく候へども、秀吉は闕白なれば、貴所よりは位上にて候間、あひしらひさげ申候。頼朝は天下を取る筋の人にて候を、清盛うつけを盡して、伊豆へ流し置き、年月立ち候内に、東國親父義朝の恩情蒙る侍共、昔を思ひ出で、貴所を取立て申候と聞え申候。氏系圖に於いては、多田の滿仲の末葉なり、殘る所なき系圖なり。秀吉は恥しくは候へと存ずるは、昨今迄の草刈わらんべなり。或時は草履取など仕候故、氏も系圖も持申さず候へど、秀吉は心たまらざる目口かはき故、かやう相成候。御身は天下取る筋にて候へば、目口かはき故とは不存候。生れ付果報有る故なりと、御しやれ事仰せられ候と承り候。

と云へるが如き、拙いながら、一種の命を孕んで居ることが窺はれる。而してたま〳〵ながら、此の種の命が影を見せては人に迫つて來るので、此の堅苦しい、たど〳〵しい、連絡の無い、冗漫な文章も、一つの英雄傳兼戰爭記として愛でられたのであらう。

『川角太閤記』は太田和泉守及び小瀬甫庵二人の作の『信長記』に續けるつもりで筆を執つたものらしい。それは『信長記』於ける明智光秀の謀叛による天正十年の信長最期の後を承けて居ることでも察せられ、また「是れより先の次第は信長記に委しく御座候」「是れは信長記に御座候間、入らざる儀にて御座候へども」などいふ文句の、所々にあるのを見れば、更に明瞭に知られ

ることであるが、『信長記』と『川角太閤記』との餘りにかけ離れた文章の優劣を見た上で、狗尾續貂ともいふべき此の書次ぎの消息を考へると、『川角太閤記』の作者の意圖は、唯だ記憶に殘る太閤關係の思出を、史料として臚列するにあつたので、文學として彼れの後を襲ぎ、或は彼れと雄を競ふといふやうな考は全くなかつたのであらう。しかしながら彼れに太閤の一生を文學化し、演義化し、乃至戰記化する能力が全く無かつたとしても、とにかく此の偉人の生涯を通貫して取纒めたのは、太閤記史における一大進歩であり、同時に一大轉機であつて、『川角太閤記』は此の點に於いて堂々たる存在理由を持つてゐるのである。

『川角太閤記』は、とにかく豐太閤の一生通記の先鞭を着けたものであつたが、初めに於いては、明智の謀叛から信長の最期に至るまでの、彼れの主要なる前半生を缺いてゐた。而して後期に於いては、關ヶ原役にまで言ひ及んで居りながら、朝鮮役については、

明くる卯の年（天正十九年）の御觸には、來年高麗へ可レ被レ成二御渡海一候條、當年は渡海の用意舟拵仕候へとの御觸なり。卯の年一年は、日本の大名小名舟路の用意隙すきま無二御座一候。

などある丈で、その上には何の記述もない。この『川角太閤記』の次ぎに出でて是等の缺點を補ひ兼ねて可なりに整つた品格のある文章を以て太閤の一生を記述したのが、小瀬道喜作の太閤記即ち世に謂はゆる『甫庵太閤記』である。

四

甫庵の太閤記は、彼れが七十餘歳にして人生の夕の道を急いだ努力の結晶であつた。序文によると、彼れが此の記二十卷の功を畢へたのは、寛永二年の初春であつたらしい。これより先、彼れは、太田和泉守と合力して『信長記』十五卷を著したが、その後幾年かを經て、和泉守の手記を役立てつゝ、今度は獨力でこの『太閤記』を成就したのである。『太閤記』の文章が、そツくりと云つてよい程、『信長記』に酷似して居る所を見ると、先出の『信長記』に於いても、太田和泉守は主として資料を供給し、甫庵は主として執筆記叙の勞に當たつたのであらう。彼れはその序に於いて、

彼の泉州、素生愚にして直なる故、初め聞き入れたるを實と思ひ、又その場に有合はせたる人、後にそれは虚説なりといへども、信用せずなん有りける。予も亦小智小見にして、虚實の本を正すこと、多くはせずなんぬ。後人あはれびあらば添削を仰ぐ。

と云つて居り、また

人の善言善行の洩れたる事を捨ておかんも本意にあらぬ心地して、同志の人を慰め、後士を善にすゝめんが爲めに、先づ板行し、世の嘲り人の誹りを招く。

とも云つて居る。是等の言によつても、甫庵太閤記の作者が、『川角太閤記』の作者の殆んど文章に介意せずして誤らざる史料を提供しようとしたのとは異つて、偉人の偉業＝謂はゆる「藤吉郎といひし凡俗より殿下に至らせ給ひし間の事」＝を感ずるがまゝに書き留め、成るべくは立派な文章に書いて、世道人心に善き影響を與へようとしたことがわかるであらう。此の二つの原始太閤記の作者は、かやうに相反した建前を持つてゐたが、しかしながら彼等の心境には、共通した強い或る物があつた。それは時代を同じうした巨人に對する誠實の情である。而して川角の誠實は、無味乾燥な無骨な拙い文章の間に、求めずして現はれた。甫庵の誠實は感心したる偉人の偉業を立派に表現して世を益しようといふ努力の中に現はれた。吾等が後の太閤記＝異書太閤記、繪本太閤記等＝を稱して藝術太閤記といふのに對して、川角、甫庵の二書を誠實太閤記と呼ぶのは、此の爲めである。

『川角太閤記』と『甫庵太閤記』とが、兩者共に『信長記』を書き繼ぐ意識を以て書かれたことは、その内容の指示する所により、また作者の同一なることによつて明らかであるが、その執筆、完成、公表の前後を明らかにすることは出來ぬ。思ふに兩者はいづれも『信長記』に書き繼ぐつもりで筆を執りながら、互に相關せず、恐らくは互の事業を互に知らずして書き進んだのであらう。而して恐らく、凡そ同じ寛永の初め頃に書き了へたのであらう。唯だ其の叙述の精粗聯絡統一の巧拙、文章の調子の高下等から見て、川角が粗笨な事實の列記の間に、求めずして統一を現はし得たのを先とし、甫庵が演義的、物語的の風格を具へた中に、可なりに藝術的の統一を成し得たのを後とすべきであらうと思ふ。

甫庵の太閤記が、關係の稀薄な武將の傳を添へて、秀吉の薨去を書かぬなど、幾多の手落と、入ほがとがありながら、とにかく整つた藝術的描寫を念としたことは、その冒頭を「秀吉公素生」で始めて、着々と筆を進めたことでも察せられる。また特殊の事柄には美しい、由緒の前置や形容を添へて、例へば北條氏政、氏照切腹の記述の前に、

哀れなる乎痛ましい乎、盛者必衰の習ひ、昨日七日までは、數萬騎の主として有りしが、今日は引きかへ、七月八日醫師安清軒が宅に移り、憂き世の日數迫り來て、時を待つ有様、物に越えて哀れなり。

と、哀情の冠飾を添へて居るのを見てもわかる。此の作者、軍の駈引の描寫には、なか〳〵の堪能であつた。その實例は枚擧に遑もないが、例へば、志津嶽の合戰に於ける佐久間玄蕃が敗軍を

寫した處に、

玄蕃尉、今日の軍は怠へがちなるべきぞと、大の眼に角を立て下知しける處に、原彦次郎進み出で、我々は左様に存ぜざるなり。今日の軍はひかへ行く程、敵の勢は彌重つて厚く成り、味方の勢は見るが内にうら崩れすべく候。願はくは唯今一合戰候へかし。先は十萬騎なりといへども、某さばき申すべく候。今朝我が勢敵を度々突きくつろげ、手並の程を能く見せ候ひし。然るにや、予が殿には、得も付けざりし故、後は心安く退き候ひつる。因レ之かくは申し候ぞ。一番合戰をば吾々致し候はんと押し返し云ひしかども、玄蕃尉諫めを防ぎ用ひざりしなり。案の如く未だ舌もかわかざるに、南方の勢、谷よりは水の湧くが如く溢れ上り、峰よりは吹き出づる木枯のやうに寄り合ひ、勢八重十重に厚く成り行きしを、北國勢のうらに控へたる弱兵見驚き、いろめき出でしを、丹羽五郎左衛門尉長秀、すは〳〵時は今なり、總がかりにかゝれや者共と金の馬じるしを振らせ、どつとかゝりしにこそ、玄蕃尉佐久間久右衛門が勢總敗軍にはなりにけれ。

と書いてある如き、昂奮して居る將士の意氣、駈引の呼吸、軍機の熟する氣はひなど、實に人に迫るやうに寫されてゐる。

甫庵は軍の駈引を巧みに寫したのみならず、名將の心意氣や氣魄の機微をも捉へて紙上に躍如たらしめた。その例として秀吉が中國攻めに、因幡伯耆の平定あらかた功を奏して、天正九年十二月の下旬に、歳莫御禮のため安土に登城して信長に見えた時の模樣の一部を、左に掲げるであらう。

（信長公）「輕々しくも來たるものかな」とて、御手を打たせられ、「久々見參もなく、床しう侍る程に、先づ今夜忍びの對面すべし。それに待たせよ」とて、御袴召し給ひつゝ、「筑前か、扨も久しやと再三宣ひ、極暑の頃より極寒に至るまで、因幡伯耆に於いて、永々の苦勞、衰老に及びてんやと、御心も安からざりしが、却つて若やぎたる」とて悦び給へば、辱さに袖のぬるゝも覺えざりけり。兩國物語の内に、御盃下され、是れ彼れ御懇ろにて、明朝登城あるべしと宣ひ、御暇下されけり。斯くて明日の捧げ物、數多き事なれば、相違なきやうに臺にのせて見せよと、終夜用意ありしかば、告げ渡る八聲の鳥も旦を催す。進物の奉行共はや持ち出で、山下より並べ置き候へ、頓て出で給はんとて、奉行共出だし給へり。山下にて、信長公への進物は道の左に、御若君達へのは右に並べ、其の次々の進物は、此くの如くせよと仰付けられ、登山ありけり。臺の數二百餘の事なれば、左右に並べつる臺は、御門に入れども、後の臺は、いまだ山下に在り。信長公殿守より御覽ありて、坂に布引におしはへ見ゆるは、彼の大氣者の筑前守が進物の臺なるべし、見よや者共と、打笑ませ給ひける。見る者膽を消し、かやうなる夥しき事は、始めて見申候と申しければ、げにも山下より山上まで臺のつゞきたるを見し事は、我れさへ無きぞとて、御氣色殊の外に見え、大氣者においては、天下無双の男なるべしと、笑みを含ませ給ひつゝ、あの大氣者には天竺を退治せよと仰付けられたりとも、否みはすまじき氣象なりとて、御頂きを摩でさせ給ふを、見るさへ快氣の心ほころびぬ。況んや微小の藤吉郎を撰び擧げられ、敵國數多御心に合ひ、目出たかりければ、漢の高祖韓信張良を以て數萬の敵を挫ぎし

も斯くこそあらめと思ひ知られたれ。

天下取の巨人二人が、山麓から山頂まで切れ目なしの太い線を引いた夥しい進物を、捧げつゝ愛けつゝ、手を握つて知遇に昂奮してゐる様子が、目に見えるやうである。語句には無論未熟の所もあるが、英雄の心事は、むしろ此の荒削りの線の太い文章に表現されるのを適當とすべきであらう。戰爭、平和、常事、非常事、いづれの方面をも立派に描く『甫庵太閤記』の作者の手腕が可なり優れて居ることは、これを見ても明らかに知られるであらう。

寛政年間に出來た石田玉山の『繪本太閤記』は、主として此の『甫庵太閤記』によつたのであらうが、とゝを左の如く書き變へて居る。

信長公此の由を聞召され、輕々しく來たるもの哉、久々見參なく床しく侍る程に、先づ今宵忍びて對面すべき間、それに待たせよとて、御袴を召させ給ひ、大廣間へ秀吉を召され、御氣色いとも麗はしく、筑前守、酷暑より酷寒の時に至つて、長陣の勞れもなく、遙々との登城滿足限りなしとて、御盃を下し給ふ。秀吉謹んで頂戴し、信長公の安泰を賀し奉り、因伯兩國の軍物語數刻に及び、明朝登城あるべしとて、御暇賜はりける。扨も秀吉此度登城の捧物、數多き事なれば、告げ渡る八聲の鶏もろともに、進物奉行下知を傳へ、持ち運ぶその品々は、國久の御太刀一腰、銀子三千兩、呉服二百領、鞍置馬十匹、明石干鯛千個、悉く白木臺に乘せ、前なるは早御門に入れども、後なるは未だ山下にあり。信長公殿主より是れを見給ひ、彼の大量入器者の羽柴筑前守が持參物を見よやとて、近士等を召して見せしめ給ふ。見る者、その夥しきを驚かずといふ者なし。信長公項を撫して、誠に羽柴は日本無双の大膽者なり、たとひ天竺震旦を討たしむとも、否とは言はじと笑はせ給ふ。

文句は平明にすら〳〵と運んでは居るが、文章の力と位とは甫庵に比べて雲泥の相違である。それはたとへば『源氏物語』と『田舍源氏』との相違ともいふべきであらう。時日の經過は必ずしも文運の進歩を意味するものではない。寛永と寛政と相距ること百數十年、かの原始太閤記の甫庵に此の優越を見るのは、吾等が意外の悦びとする所である。

『眞書太閤記』は『繪本太閤記』に先だつて生れ出でたものであるが、今日吾等の目に入るのは『繪本太閤記』が出來て後、嘉永年間に栗原柳莽に加筆されたもので、謂はゆる『重修眞書太閤記』である。而して吾等は、此の『重修眞書太閤記』が太閤文書の集大成とも見るべきものであらゆる太閤記中の白眉である、昔の軍記に譬ふれば、恰も『平家物語』もしくは『太平記』にあたるものであるといふのである。

五

上來太閤記史の概略を記し了はつて、吾等はいよ〳〵『眞書太閤記』について語るべき時となつた。此の太閤記の「何物」「何故」「如何に」を說いて、それが何故にあらゆる太閤記中の白眉であるかを語るべき時節となつた。

『眞書太閤記』に、形容詞のつかない唯だの『眞書太閤記』と、謂はゆる『重修眞書太閤記』との二種類がある。前者を前期の『眞書太閤記』といふべくは、之れに對して後者を後期の『眞書太閤記』といふべきであらう。『重修眞書太閤記』は栗原柳莽が在來の『眞書太閤記』に加筆して嘉永二年(二五〇九)に刊行したものであるが、此の前後の『眞書太閤記』の中間に、寛政九年(丁巳二四五七)に、大阪の畫家法橋石田玉山の著作にかゝる『繪本太閤記』七編八十四卷が現はれた。『繪本太閤記』は恐らく專ら前記の『眞書太閤記』に據りつゝ、或る意圖のもとに編成替をしたもので、而して『重修眞書太閤記』は、此の『繪本太閤記』をも參考しつゝ、前記の『眞書太閤記』に大修正を加へたものであらう。

『重修眞書太閤記』の筆者栗原柳莽は名を信充、通稱を孫之丞と云ひ、薙髮して又樂と云つた。寛政六年江戸の駿河臺に生れ、明治三年、七十三歳にして京都で歿した。名高い故實家で、その著述には、『玉石雜誌』『柳莽隨筆』『武器袖鏡』『甲冑圖式』『刀劍圖考』『令義解講義』『日本紀私讀』等數多き考證の著述があつたが、その文學的著作は、多分の考證癖を加味した此の『重修眞書太閤記』唯だ一つであらう。

彼れは此の書の序文の中に、かう云つて居る。

一、眞書太閤記世に流布すること久しく、童蒙多くこれを信ず。予一日此書を檢閱し、かつ小瀨甫庵の太閤記、夕顏巷の豐臣家譜、竹中重門の豐鑑、梯屋喜左衛門祖父物語等に比較し、その同異を標記し誤說を訂正し、朱墨塗抹ほとんど反故紙の如し。再度讀過して又少々改刪を加へ、終に題に重修の字を加へ以て流布本と別つ。たゞ願はくは小兒輩をして俗本の僞をすてゝ英雄の眞面目を了知し、姦黠の詐謀と用兵の計略と、日を同じく言ふべからざることを知らしめんが爲なり。

一、流布本の事實荒凉迂怪妄談に近しと思はるゝ事も少なからず。然れども多く尾濃の間野老の口碑に傳へ神社佛刹の古牒に徵すべき事も少なからず。然る時は概して荒凉妄談ともなし難し。依つて他の譜牒に考し、古簡逸文に校正し、その僞ならざることを證す。

一、流布本のうち、俗手書寫の序に意を以て改竄せしと見ゆる條もまた多し。それらは正說に就いて筆削加ふ。

一、此の書重修の本意流布本の僞を正し、俗手の竄入を改め、成るべきたけ流布本にて行はんことを庶幾す。よつて强ひて小瀨甫庵の本に同じからんことを欲せず。

と云つて居るが、吾等は之れによつて、柳葬が前期の『眞書太閤記』に加へた改刪添削の本意と手心とを知ることが出來る。『眞書太閤記』は德川幕府に對する遠慮から、遂に刊行の機會を惠まれなかつたと云はれる。隨つて此の十二編三百六十卷の大作は、筆寫又筆寫の手續によつて、遍く民間に流布したので、その間に多くの異本が出來たのであらう。それは丁度『平家物語』の異本が百數十種の多きに上つてゐるのと似たものであつたであらうが、柳葬は先づそれらの流布本の主なる幾種かを集めて、其の間に取捨選擇を加へたのであらう。彼れの謂ふ「流布本」とは、珍しい異本に對して廣く行はるゝ普及普通の本を指したのか、或はたゞ世間に廣く行はれて居る眞書太閤記といふ意味なのか、明らかでないが、序文の中に「流布本の中、俗手書寫の序に意を以て改竄せしと見ゆる條もまた多し。それらは正說に就いて筆削を加ふ」と云つて居る所を見ると、彼れが幾種類かの眞書太閤記を取集めて、史實本位、正說本位に取捨したことが明らかなやうに思はれる。

彼れはまた多くの史乘、記錄、言傳を參照した。彼れ自ら序文に擧げてゐるのは、甫庵の太閤記と豐臣家譜、豐鑑、祖父物語の四種に過ぎぬが、內容を檢べると、織田系圖、家忠日記、陰德太平記、淡路常盤草、島左近覺書、梅月堂筆記等、いろ〳〵あつて、全部を列擧すれば、夥しい數に上るであらう。彼れは是等の記錄から得た知識を一段下げにして本文の間々に挿入した。それには二行三行の短いものから數十行に亘る長い文章も少なからずあり、折々は意見の披露や、金錢の換算など、註釋とも稱すべき事柄の挿入もあつて、是等を集めるならば、恐らくそれだけで二三十卷をも成すであらう。是等の追加挿入は彼れが謂はゆる「重修の本意」の中心を成すもので、彼れの本領たる故實癖の最も濃厚に現はれたものであり、同時に最も歷史的傳記的價値に富んだものであるが、一方文學的讀物の創作として見れば、かやうな考證談理の非藝術的要素の介入によつて、折角藝術鑑賞の夢幻世界に引き込まれた讀者の心境を攪き亂すのは、一種の藝術冒瀆ともいふべきものであらう。

柳葬が「重修の本意」の、もう一つの中心は、此の作全體にわたる文章の取捨選擇と洗錬の加筆とである。彼れは序文の冒頭に、「同異を標記し、誤說を訂正し、朱墨塗抹ほとんど反故紙の如し、再度讀過し又少々改竄を加ふ」と書いて居る。これは主として事實の比較についての事であらうが、事實を改むれば文章も改まるのは自然の事で、それのみならず、事實に關係の無い部分にも、可なり思ひ切つた斧鉞を加へたことは想像に難くない。また一方主として前期の『眞書太閤記』に據つたらしい玉山の『繪本太閤記』などと比較しつゝ、彼れ是れ思ひ合はせると、前

期の『眞書太閤記』は非常に浩瀚で面白いものではあるが、その文章は可なりに粗笨蕪雜なものであつたらしく、それが柳葬の勞を惜まぬ加筆によつて、あれだけの名文となつたのであるらしい。さう見ると、柳葬は『眞書太閤記』の作者たる名譽の半分を負うてもよい筈で、吾等は前に殺風景な考證的談理的要素の介入によつて、あたら大軍記の文學的興味を削減したと言つて、彼れが入りほがの老婆親切が思ひ設けぬ結果を惹き起こしたことを遺憾としたが、此の内容の改正と文章の洗錬とは、穢い土くれのついてゐた璞玉眞書太閤記を磨いて光輝ある太閤記たらしめたもので、以前の過失を償つて餘りあるものといふべきである。

六

吾等は不幸にして前期の『眞書太閤記』を見たことがない。中學時代に鄕里で借覽したのは、「嘉永二年己酉歳九月栗原孫之丞信充」といふ署名のある序文を持つた『重修眞書太閤記』であつた。明治以來活版に附せられたのは、概ね「重修」の二字を削除してはゐるが、内容は悉く柳葬の『重修眞書太閤記』である。

前期の『眞書太閤記』が、何人によつて、何時、何處で書かれたかといふことについて、吾等は全く知る所がない。思ふに作者は江戸幕府の嫌疑を恐れて、わざとその名を顯はさなかつたのであらう。而して借りては寫し、寫しては借りられつゝ、廣く日本全土に行はれる間に、此の大作の成立の「誰れが」「何處で」「何時」といふ三要件が全く忘れられて了つたのであらう。けれども吾等が、柳葬の加筆後にも、明らかに殘つて居る文致の特色に徵し、また寛政年間に大阪で書かれた『繪本太閤記』の文章と比較して、前期の『眞書太閤記』の出來たのは、元祿と文化文政との間で、恐らく元祿よりも文化文政期に近い時代に出來たのであらうと勘へる。また『繪本太閤記』と同じやうに、京阪地方の人に書かれたものであらうと考へるのである。空想の當推量ではあるが、前の部分では廣い意味の元祿期として享保までを除き、後の部分では「寛政の序幕」として明和、安永、天明を除き、その間の元文（一三六九）から寶暦の末（一四二三）に至る五十數年間に於いて、京阪の文壇では西鶴の浮世草子、近松の淨瑠璃、八文字舍の氣質物（かたぎもの）などが、いづれも行くべき所まで行き盡くして、そろ〳〵實錄物に興味を持つやうになつた時に、幕府の政治にあきたらずして、豐公の豪放濶達な天下取の氣象に憧れを持つ能文の風雲兒が、ほしいまゝに傳奇的の趣向を凝らして、知らず〳〵遙かに京傳、馬琴等が長編の讀本（よみはんもの）物に呼應したといふのが、この前記の『眞書太閤記』の出現に關する史的因緣の隱微ではなからうか。

吾等は先きに『川角太閤記』や『甫庵太閤記』を以て、時代を同じうした巨人に對する崇拜の情を以て見聞のまゝを寫した誠實太閤記であると云つたのに對して、眞書、繪本の二つの太閤記を藝術太閤記であると云つた。目のあたりに見た英雄を、目のあたりに見た同胞に語るには、素樸な斷片記述も面白いであらう。また餘りに荒唐奇怪なる理想化は却つて讀者の感情を害するでもあらう。けれども巨人が長へに眠つつて後の百數十年は（秀吉の歿去は慶長三年の一二五八、德川春家の元文元年は一三九六）人間秀吉を神化して、まんまと豐國大明神たらしめた。その間には幕府の睨みが利く利かぬにかゝはらず、彼れの周圍には傳說の後光が無數に輝いて來た。此の時代の空氣を呼吸した作家が、同じ時代の空氣を呼吸して居る讀書層に呼びかけて、彼等の意氣を振ひたゝせ、古英雄の超越的面目を髣髴させようとしたのが、前期眞書太閤記の作者であつた。彼れが秀吉の祖先に昌盛法師を創造し、此の叡山の名僧をして、佛法による檀越の敎化に滿足せず、天下の騷亂を鎭め萬民の塗炭を救はうと念じて、竹生島の辨財天に一千日の歩みを運び、瀟灑の當夜に、汝の子孫に威名萬代の名將英雄を授くるぞといふ神託を得、還俗して妻を娶り、子を設けさせたのも、其の爲めである。百姓出の一武弁藤吉郎をして織田家の軍學者平手某と相對し、議論實戰の兩方に於いて鮮かに勝たしめたのも、其の爲めであらう。それ等の趣向は理智的に見て極めて不合理なる荒唐無稽の傳說であるが、しかしながら人情的、時代的には極めて自然的合理的なる事で、かういふ方面の材料の豐かな蒐集と、巧みな描寫とが、寫本の眞書太閤記に翼を添へて天下を横行せしめたのであらう。而して後期の『重修眞書太閤記』の筆者栗原柳菴が、僞を正し實に合せしむることを旨としながら、同時に序文に於いて、

成るべきたけ流布本にて行はんことを庶幾す。よつて强ひて小瀨甫庵の本に同じからんことを欲せず。

と言つたのは、自家の長を發揮しながら、よく止まる所を知つたものとも云ふべきであらう。とにかく彼れが故實家の面目を發揮しつゝ、同時に原典本來の特色を保存しようとしたのは、偉いと云はねばならぬ。殊に人物史實ふたつながら眞面目にその眞を傳へようとして成功した甫庵の太閤記に習はうとしないで、荒凉迂怪の妄談に近いところのある眞書太閤記本來の特色を、成るべく活かさうとしたのは、偉いと云はねばならぬ。

七

吾等は序に石田玉山の『繪本太閤記』の作からについて一言し、之れによつてかた〳〵眞書太閤記の面目を明らかにしたいと思ふ。『繪本太閤記』は或點では、たしかに『眞書』に優つたところ

ろのある作である。此の書は、好む者からは「豐太閤の眞面目を發揮するが爲めに縱横の筆を振ひたり」と云はれ、また『眞書太閤記』に於ける朝鮮征伐の記事が、皆無に近いほど簡粗であるのに對して、かなり精密に記述してある所が悅ばれてゐる。ひそかに思ふに『繪本太閤記』は『眞書太閤記』を競爭の目標として作られたものであらう。『繪本』の作者は畫家の法橋である。彼れは『眞書太閤記』の面白いのに感心した。そして其の驚くべき流行を見て、自分も類似の太閤記を作らうと考へたであらう。而して自分の太閤記に、いかにして眞似事ならぬ獨自の特色を與へようかと考へて、先づ『眞書』の委曲精細なるを簡潔化して、之れを補ふに、お手の物の繪畫を以てしようと考へたであらう。簡單化する事の中には、極端な記述を中庸に改めようといふ企ても含められたかと考へられる。次ぎには太閤の全生涯の各部分を、價値與味に相應した割合で手落なく寫さうと考へたであらう。かくして簡潔を欲するところから、彼れの文章は自然に漢文體に近いものとなつた。同時に强い調子が加はると共に國風の微妙な風味を失ふ傾きがあつた。あらゆる事實に章節を割り振る所から、その記述がやゝもすれば粗略になる傾きがあつた。けれども眞書が小田原征伐に對して約四十卷二百數十頁を費しながら、朝鮮征伐には一卷をも割いてゐないのに對して、『繪本』が朝鮮役をも可なりに詳しく面白く寫して居るのは、一大成功といふべきであらう。最後に作者得意の自ら畫いた挿繪の豐富な提供、これは實に此の『繪本』の壓倒的勢力であつた。

『繪本太閤記』は是等の特色をもつ點に於いて、たしかに『眞書太閤記』の大敵であつた。柳莽が『眞書』に加筆するに當たつて、『繪本』をも參考したことは、時々「繪本太閤記に曰はく」の挿入をしてゐるのでも明らかであるが、彼れは挿畫に於いては勿論、文章に於いても、全く『繪本太閤記』の眞似をしなかつた。そして一方では氣品、誠實に於いて、第一位たる甫庵の『太閤記』をも眞似なかつた。そしてその專門の故實考證には聊かかたはら痛いものもあつたが、大體に於いて、我が加筆する原典の特色本領を知つて、あくまでも之れを護立て輝かさうとしたのは、實に仰ぐべき態度であつたと云はねばならぬ。

八

以上の所說を具體化する爲めに、吾等は最後に唯だ一節の引例を試みるであらう。而して太閤記の雄篇は、何と云つても甫庵の『太閤記』と、『繪本太閤記』と、此の『重修眞書太閤記』との三種であるが故に、而して『眞書』も『繪本』も常に、精神的には甫庵の『太閤記』を師宗と

して仰いでゐたやうに見えるので、此の三つを並べ掲げて對照的説明を試みようと思ふ。

信長本能寺大變の直前、秀吉が中國に出征して、高松城を水攻めにした時に、城將清水長左衛門尉宗治が、宗徒の二三と切腹する事を條件として城兵全部の助命を求めて來た。秀吉は宗治の高義に感じて快諾を與へ、約束の時刻に檢使役堀尾茂助をして舟をよそほひ、酒肴を用意して宗治等を迎へしめた。互の挨拶がすんだ後、秀吉が情の酒を悠然と酌みかはして、宗治、その兄の入道月清及び鐵砲大將の難波傳兵衞尉、近松左衞門尉等が相ついで潔く切腹した。こゝに引くのは、その折に彼等が悠々と、謠をうたつて自刄したといふ名高い武士道の物語であるが、甫庵の『太閤記』は、その謠を月清入道唯だ一人の風流として、謠曲『誓願寺』のクセを歌はしめ、眞書、繪本の二つは宗治、月清及び近松(眞書は末近)三人の事とし、宗治、月清にはそれ〴〵に「江口」「遊行柳」を、而して近松には「八島」を舞はせて居る。それ〴〵の本文は左の通りである。

かくて堀尾より樽肴を贈りしかば、扨も心ある哉心あるかなとおし返し感悅し、月清二三酌みて長左衞門にさしければ、それも數盃を傾け、難波殿へ恐れ侍るとてさしぬれば、近松に一禮し、その後金吾へさしてけり。長左衞門中のみせんとて、心よげに請けし處に、月清誓願寺の曲舞を謠ひ出でけり。聊か臆したる顏色もなく常の如し。かくて酒も過ごしゝかば、月清入道、我れより始めんと、押肌ぬぎて、矢聲して腹十文字にかき切りけり。殘る三人もきらよく腹を切り、今此の楮上に其の名香ばしく殘しけり。かゝる處に與十郎、某は月清老人が馬取にてありしが、緣をゆるし、一所懸命の地を與へられしなり。死出三途の道しるべせんとて、心よげに切腹してけり。茂助その志を感じ、四人の首に相添へ、秀吉へ御目に懸け候へば、いづれも三仁義の死を遂げし者の首也。四人の首を三方にする、與十郎が首を別にするよと仰せけり。(甫庵太閤記)

敵陣近く漕ぎ寄せて棹さしとむれば、堤の上に立ち出で、清水が自害すとや、我れも見ん、彼れも見よや、と居並びたり。宗治少しも臆する色なく、すんと立ちて一禮し、さて一曲かなでんと、刀を拔いてさしかざし、いと清げなる聲をあげ、「河船を止めてあふせの浪枕、浮世の夢を見ならはしの、驚かぬ身ぞはかなき」と、うたふ聲の下より、腹十文字にかき切れば、郎等の高市允、太刀を振上ぐるかと見れば、はや首は前にぞ落ちにける。月清入道これを見て「道のべの清水流るゝ柳蔭、しばしが程の世の中に、心とむるぞ愚かなる」(遊行柳)と聲いとをかしくうたひつゝ、續いて腹をぞ切つたりける。末近左衞門これを見て、舟板丁々と踏みならし、「敵と見えしは群れゐるかもめ、鬨の聲と聞こえしは、浦風なりけり高松の、朝の露とぞ消えにける」と、少し末をうたひかへ、腹かき切り、北枕にぞふしたりける。相從ふ者には、難波傳兵衞、白井與三衞門、草履取の七郎二郎、いづれも潔く自害しけるを、高市允六人の死骸を取り納め、筑前守より出だされし檢使堀尾茂助に向ひ、悉く姓名の札を付けて、これを渡し、其の後己れも腹切り、みづから喉を押し切りてぞふしたりける。數萬の軍兵これを見て、あはれ大剛の者やと感ずる聲、しばしは鳴りもやまざりけり。(重修眞書太閤記)

堀尾も近く船さしよせ、是れは筑前守が近習堀尾茂助吉晴にて候。何事に於いても、御望みの事あらば仰聞けられ候べし。筑前守各〻御存分の結構深く感じ申され、約諾の旨一事も相違あるまじく候。心静かに生害遂げらるべく候といふ。四人の者欣々然として悦びの色を顕はし、長左衛門尉宗治立上り、いで最期の一曲奏でんとて、腰刀引抜き頭にかさし清き聲し、「河舟をとめて逢瀬の浪まくら、浮世の夢を見習はしの、驚かぬ身こそはかなけれと、歌ふ聲と諸共に、腹十文字に掻切れば、郎等與十郎太刀振上ぐると見えければ、即ち首は落ちたりける。月清入道これを見て「道の邊の清水流るゝ柳かげ、しばしが程の世の中に、心とむるぞおろかなる」と、聲をかしく打謠ひつゞけて切腹したりける。時に近松左衛門尉、船ばたの板じきを丁丁と踏み鳴らし、「敵と見えしは群れゐる鷗、関の夢と聞こえしは、浦風なりけり高松の、朝の露とぞ消えにける」と、末を少し謠ひ替へ、難波傳兵衛諸共に腹掻き切つて伏したりける。與十郎は四人の死骸を取收め、首に姓名の札を付け、検使堀尾に相渡し、其の後已れも腹かき切り、自ら咽喉押切つて終に空しく成りければ、數萬の軍共これを見て、あはれ大剛の兵かなと感ずる聲、しばらく鳴りも止まざりけり。

（繪本太閤記）

三篇それ〴〵の味ではあるが、一番素朴で、自然で、餘情のあるのは、甫庵の『太閤記』であらう。彼れは検使の堀尾茂助をして情の酒肴を携へしめた。そして各〻盃を重ねて後に、難波が宗治に差し、宗治が二度目の巡盃を受けて飲まうとする、と一の年長で、城主の兄であり、沙門であり、酒客であり、同時に風流家でもあつた月清が、寂昭法師の意氣を偲んで、忠義に死する一同の極樂入りを豫約するかの如く、

笙歌遙かに聞こゆ孤雲の上なれや、聖衆來迎す落日の前とかや。

と、寂昭の名句を朗々と謠ふなどは　實に妥當で自然で無限の味ひである。彼等は之れに聞き惚れて一段の興を催しつゝ酒を過ごして、月清を最初に、四人相ついで自刄した。而して月清の從者が跡の始末をして追腹を切つた。首切りの介錯は記述してゐないが、首に札をつけたとある以上は、餘情として容易に推察し得ることである。吾等は此の酒を酌みかはして後に腹を切るところ、月清一人が謠ふ所、介錯の無風流を省略した所が、甫庵太閤記の絶妙なる所で、これがまた事實であり、世間でもそのまゝ言傳へて持囃したのであらうと思ふ。

轉じて『眞書太閤記』を見ると、『眞書』の作者は此の笑つて死に就く忠義の將士の會合から、酒といふものを取上げた。酒を取上げた結果は、和やかな談笑の一幕が消え失せて、忠義の勇將等が直ちに切腹に着手る事となつた。酒なしの場合に於けるだしぬけの謠曲は相應はしくないが、作者は甫庵の太閤記に於ける謠曲の趣向を取除くに忍びなかつたのであらう。のみならず、彼れは月清一人に謠はせるのに物足らぬ淋しさを感じて、三人に別々の曲章を謠はせることにしたのであらう。先づ城主宗治が最初に腹を切るのを自然として、彼れをして「江口」の「河船を

とめて逢瀬の浪枕、浮世の夢を見習はしの」といふ、船に縁あり、臨終の暗示もある意味の句を謠はしめた。つゞいて月清和尚をして西行の句を借りて浮世に執着する愚かしさを謠はしめた。そして最後に年若き近松をして、これには謠ふのみならず、勇ましく立つて拍子を踏みつゝ「八島」のキリを舞はしめた。作者は之れによつて變化に富んだ賑やかさを加へようとしたのであらう。思ふに此の一條に於いて『眞書太閤記』の作者が甫庵の向うを張つて其の上に出でようとした所は、かやうな場合に於ける酒宴を不自然として、酒を取上げたこと、切腹は先づ城主より始めるのを合理としたこと、腹を切れば、すぐに介錯するのを當然として、それを書き現はしたこと、一人の謠よりは三人それ〴〵に別の文句を謠はせ、一人をしては謠ふのみならず立つて舞はしめるのを、變化があつて賑かで、より多く藝術的であるとしたこと等であるが、その方の眼で見れば、いづれにも理由のあることで、『重修眞書太閤記』の成功は、主として、此の合理的に、傳奇的に、賑かに、の原則を保持して、之れを實現した點にあるといふことが出來る。

『繪本太閤記』は全く『眞書太閤記』の趣向を取つて文章を簡短にし、餘裕を少なくしたものである。跡始末をした從者を甫庵が月清の馬取の與十郎とし、『眞書』が宗治の郎等の高市允としたのに對して、『繪本』が郎等の與十郎としたのは、先行名作の二篇を折衷したのであらう。

要するに、『重修眞書太閤記』の大趣意は、甫庵の『太閤記』などが、同時代の巨人に關する見聞をさながらに寫して誠實を表現しようとしたのに對して、傳說に包まれた英雄を、成るべく面白く、勇ましく、美しく、大きく、偉く、藝術的に寫さうといふにあつた。而して成るべく合理的に、傳奇的に、精細に、變化曲折に富むやうに、而して國民の誇りとなり、崇拜の的となるやうにと努力して、一旦可なりの程度に成功し、數十年後更に見識高き學者文人に磨きをかけられて、堂々たる偉觀を呈した英雄傳の戰記文學、それが『重修眞書太閤記』であつたのである。

（昭和十四年十月）

第十五　椿說弓張月を讀む

一

曲亭馬琴は、江戸時代三百年の中、元祿期と相並んで文學的に最も光つた文化文政期を代表する最大作家である。彼れは明和四年（皇紀二四二七年）の六月九日に江戸に生れて、嘉永元年（二五〇八）の十一月六日に、八十二歳の高齢を以て病歿した。彼れの著作は一口に四百部、四千卷と稱せられるが、少なくとも實數三百數十部、千四五百卷には上つたであらう。彼れが作の種類は俳諧、和歌、漢詩、漢文、小說、考證、評論、隨筆等の諸方面に亘つて居り、小說には黃表紙、洒落本、讀本、飜譯等を含んで居るが、その本領は小說で、小說の中では讀本が中心を成してゐた。彼れの讀本は、三十歳（寛政七年）の作『高尾船字文』を最初の試みとして、主なる作だけでも六十餘篇を數へられて居るが、その中で拔群の大作として天下に許されてゐるのは『弓張月』と『八犬傳』との二篇である。而して此の『椿說弓張月』は彼れが三十九歳（文化二年、二四六五）から四十四歳（文化七年、二四七〇）に至る、創作力の最も旺盛な時期に成つたもので、八犬傳に見るやうな趣向文章の弛緩がなく、特殊な癖の放漫な反覆が無く、また人物が大きく、場面が廣く變化のある點などから見て、時に『八犬傳』以上とも評價されるものである。すなはち『弓張月』は『八犬傳』と並べて、少なくとも馬琴が最大作二篇の一と見られ、時としては最大一位の傑作とも見られるものであるが、それは一體どういふ時期に成つたものであるか。どんな事をどんな風に書いたものであるか。吾等は之れについて簡單な說明を試みようと思ふ。

二

馬琴の長い文學生涯は、「鶯の初音に眠る座頭かな」の一句を吐いて人を驚かしたといふ七歳の安永二年に始まつた。之れに次いだ小さい劃期は、二十一歳の天明七年に出した洒落本の處女作『猶謝羅子』であつた。次ぎは、山東京傳に弟子入りした寛政元年に書いた『廿日餘五十兩盡用二分狂言』といふ黃表紙で、彼れは之れを「京傳門人太榮山人」の名で公にした。寛政三年から暫らく京傳の趣向によつて、『實語教幼稚講釋』（三卷）『龍宮羶鉢之木』（三卷）等の讀本を代作した。寛政七年、二十九歳にして『高尾船字文』を出した。而してこれが曲亭馬琴の名によつて讀本を公にした最初である。

讀者は江戸の中期、安永、天明（二四三二—四八）の二十年が、謂はゆる通人の一世を風靡した自墮落な生活のその極に達した時代であることを記憶せられるであらう。當時の世相はその頃行

はれた「世にあふは道樂者に奢り者ころび藝者に山師運上」の狂歌によつても知ることが出來るが、馬琴もまた此の一代の大波に流れ漂つた作者の一人であつた。それは彼れが戯作者等の群に伍して輕薄な洒落や遊里の消息などを寫した短篇小說の洒落本や黃表紙を得意に書いてゐたのを見てもわかる。山東京傳を師と仰いで、其の家に食客となつたのを見てもわかる。若し世相がこのまま推移して行つたならば、此の大小說家も恐らく醉生夢死の生活をつゞけたのであらうが、そこに突如として彼れの眠りを醒ますべき一大政變が勃發した。寬政二年に於ける白河樂翁公の儉約勵行、洒落本禁止の御觸れである。

此の禁令は當時の戯作者等に取つて一大恐慌であつた。殊に困つたのは其の方面に無類の技倆を發揮して天下の評判を取つてゐた京傳であつたが、彼れは翌寬政三年、書肆に語らはれ『娼妓絹篩』『仕掛文庫』等の洒落本を出して手鎖五十日の仕置を受けることとなつた。かくして京傳は一つは先非を悔悟したのでもあらう、一つは他の方面に活路を見出だしたのでもあらうが、義理人情勸善懲惡の道義的趣向によつて、世間の爲めになる小說を書くことを考案した。そして門下として其の家の食客となつて居る馬琴に代筆させ、京傳作と稱して賣出したが、それは前に擧げた『龍宮甕鉢の木』や『實語教幼稚講釋』等で、相應な評判を取つたと云はれる。

馬琴は寬政四年に京傳の家から書肆の蔦屋に移つて、『御茶漬十二因緣』や『自花園子食氣物語』、附燒刃の片々たるものであつたが、寬政七年に始めて馬琴と名乘つて『高尾船字文』を出した頃から、其の教訓主義が段々本物に成つて來た。而して馬琴の此の本領を發揮した讀本が、年々貫祿を備へて來て、人物、事件、寓意、文章、凡てが立派に具足して、始めて一代を飾る代表的名作となつたのが『椿說弓張月』であつたのである。

『弓張月』が馬琴の長い文學生涯中最も油の乘つて來た時期に出來たことは、彼れが『弓張月』執筆の六年間に於いて、同時に『新篇水滸畫傳』(十一卷)、『墨田川梅柳新書』(六卷)、『賴豪阿闍梨怪鼠傳』(六卷)、『三七全傳南柯夢』(六卷)、『俊寬僧都島物語』(八卷)、『旬殿實々記』(十卷)、『松染情史秋七草』(六卷)、『夢想兵衞胡蝶物語』(五卷)等、多くの代表作を出したのを見ても知られる。而して其等の中で群を拔いたのは『弓張月』二十八卷で、『弓張月』は譬へば美しい群星に取りまかれた大月輪のやうなものであつた。

三

『弓張月』は人物が多く、場面が廣く、事件が錯綜して、その荒筋を語るだけでも容易な事ではないが、おほまかに、三部分から成立つてゐると見ることが出來るであらう。第一部は保元の亂を中心とした、極めて短い最初の部分である。場面としては京都から九州近畿に限られ、事件としては、入道信西との痛快な口論から、父爲義の情による九州下り、短年月間に於ける自ざましい電擊的の九州攻略、そこで美人の勇婦を得、八町礫の喜平治その他數多の勇士を得て、二十歳足らずの年少ながら智仁勇の三德をゆたかに發揮して居る中に、信西の巧んだ難題に逢ひ、朝命の鶴を琉球で求め獲て都に上ると、忽ち保元の亂が勃發した。彼れはその戰で敵味方の目をさます樣な激しい軍立を見せたが、結果はいつしか大敗軍となつて、遂に生捕られて伊豆に流される、といふのが此の部分の荒筋である。『弓張月』は材料を『保元物語』『和漢三才圖繪』『神社考』『中山傳信錄』その他無數の史籍口碑から得て居るが、中心の取材はやはり『保元物語』からであつた。彼れは原材を巧みに使ひこなして、殆んど模倣重覆の跡を見せて居ないが、その點で殊に面白いのは信西と口論の條であらう。本來此の條は『保元物語』の左大臣賴長に謀を進める軍評定の條に對して案じ出したものであらうが、信西との論も面白く、殊に二人の名手が射る矢の四本を、悉く手取りにし、或は袖に口に取り留める光景など、實に冴え切つた筆である。

二人（瀧口の式成、則員）も今はせんすべなく、豫て二の矢あるべしと定められたれば、矢二條を手挾みて立ち向へば、君はさらなり、當座の人々、手に汗を握り、今の爲朝が命は、日影待つ白露よりも、なほ消え易かるべしと思ひ居れりける。かくて式成弓に矢つがひ、滿月の如く引きしぼり、矢聲をかけて切つて發つを、爲朝雖手に丁と取る。程もあらせず則員が放つ矢、胸下近く飛び來るを、これをも雄手に受けとめたり。こは射損ぜし口惜しさよ、たとひ射殺すまでに至らずとも、やはこの度は取られじと、兩人齊しく引きしぼり、しばし透間を窺ひて、よつ引き、へうと發つ矢を、一條は袍の袖に縫ひ留めさせ、また一條は、取るに間なければ、口もて楚と食ひ留めしが、忽ち鏃を嚙み碎きつ。その疾きこと陽炎の登るが如く、雷電の閃くに似て、人間技ともおぼえねば、これを見るもの醉へるが如く、嘆賞あまりて聲だに得揚げず。爲朝は取りたる矢を、左右へ搔いやり捨て、いでその法師首給はらんといひもあへず、御階の上に跳上り、信西に掴みかゝらんとす。

これが此の作に於いて爲朝の戰ひ振を寫した初筆であるが、恐らく此の方面の代表的名文と稱すべきものであらう。總じて此の第一部には、短い中に趣向の曲を見せて居りながら、悠然と落ちついて書き進んだ趣があり、何となく品位が備はつてゐて、三部中最もすぐれて居るやうに思はれる。

第二部は、流された伊豆の島々に於けるロマンスを中心とした部分である。その荒筋は、護送

の兵士等を畏服させ、酷吏を懲らして善政を施し、自然兒の荒夷どもを手懐けて人間の大道を教へ、男女離れ〴〵に住む島人どもを諭して結婚させ、子供の一人を大紙鳶に括りつけ伊豆の對岸に送つて足利源氏の世繼とし、さて討手の船の一艘を一矢に沈めて後に自刃しようとしたが、妻子に諫められ、舟に乘つて讃岐に渡り、白峯に登つて新院の靈に謁した。ついで九州に渡り、手勢を集めて、清盛に對する復讐を夢想しつゝ舟裝ひをして出かけたが、大颱風に逢つて、離れ〴〵になり、多くは海底の藻屑となつた、といふので、場面は細かにいふと、伊豆の島々から海路讃岐を經て、九州から琉球に及んで居るが、忠臣孝子の義理人情や面白い說話が豐かに盛られて居るにかゝはらず、何となく趣向の曲の鼻につく嫌ひがある。

第二部にも、優れた文章は無數にあるが、讃州琴彈の神社で、保元の亂後に爲朝を訴へた武藤太が美女に逢ふ條などは、殊に支那小說の影響を受けつゝ、その上に出でた趣を見せて、一種の異味である。

時に海上雲をさまりて、玉兎高く昇り、金波潮に映じて、さながら白晝の如くなるに、高欄のほとりに當たりて、忽然と琴の音聞えて……聲いと面白うゝたひ出でたるに、調べ又妙なれば、磯の松風もこれが爲めにけおされ、浦の千鳥も恥ぢて音をやとゞめなん。武藤太はたえて詣づる人なしと思ひしに、こは神か人かと疑ひまどひ、欄のほとりに立出でて見れば、年紀二八ばかりなる美女の、都にもあらぬ打扮して、繡鍾に紅の襲せし袷も、虛燒の薰りさへ得ならず。月の眉の艶なる、柳の腰のなよやかなる、譬へば櫻の枝に海棠を咲かせて、芙蓉の色香をこめたるに異ならず。ほとりには然るべき從者もなくて、女童只だ一人侍りけるに、眞菅の莚布きまはし、月に對ひて筑紫琴搔き鳴らせる光景は、天津少女や影向しけん、龍宮の乙姫の人間に遊ぶかと疑はれ、心も蕩け、魂も消ゆるばかりに覺えしかは、忽ちかや〴〵とうち笑ひ。

行方も知らぬ男女が、偶然に相逢うて、忽ち相親しみ、相許し、宴を張り、歡を極むふといふ如き、蕩けるやうな夢現の境地の描寫は、遠くは張文成が『遊仙窟』以來支那小說の一特色で、近くは上田秋成が『雨月物語』に於いて換骨の妙趣を見せたものである。馬琴も恐らくそれらの暗示によつて、此の理義の連絡をぼかした夢幻境を描き出だしたのであらうが、同時に彼れの偉さは、此の夢幻境を前置とし、やがて溫柔淫蕩の幕を切つて落して、直次ぎに痛快壯烈なる復讐の光景を見せたところにあるので、此の急轉對照の妙致は、恐らく彼れが筆を執りつゝ、ひそかに北叟笑んだところであらう。見よ、武藤太は酒をすゝめられた。醉ひつぶれると、莊麗な別の家に運ばれた。目をさますと、立派な引出物を並べて、また酒を勸められた。而して盃を揚げると同時に、肴として折敷に据ゑて出されたのが、何と、同行二人の惡棍の生首であつたではない

か。やがて天女のやうな美人が、儼然と開き直つて名乗をあげた。

やをれ武藤太怕るゝことなかれ。わらはは汝に訴人せられて、縲紲の恥辱を受け給ひし爲朝の妻白縫なり。武藤太は吃驚した。そしてやがて復讐のさいなみを受け、指を斷たれ、肩を刺されて、醜の首を打落された。

手とり足とり赤裸にして、忽ち緣の柱へ麻索もてしかと括りつけ、左右の手首をば前の方へ引き伸ばさせて、氷なす懐劍を抜き出だし、十の指を一つ〳〵、切り落し切り落せば、鮮血滾々と流れ出でて、十條の赤泉濺る如く、又梅液に漬けたる生姜に似たり。

白縫はやがて武藤太の首をその袖に包んで、配所に護送さるゝ爲朝に見すべく急いだ。といふのであるが、此の支那小說風の夢幻境を前幕とした二段構の如き、恐らく馬琴が小說技巧の中、最も巧妙なるものの一つであらう。

吾等は第二部から、馬琴が得意としたらしい別方面の名文の一種として、もう一つ、爲朝が白峯なる新院の御廟に詣づる一節を引くであらう。

石の玉垣の斜なる扉を押開きて跨躇し、さて申すやう、君十善萬乘の聖主として、錦帳を北闕の月に輝かし給ひしも、今は懷土望鄉の魂、玉體を南海の俗に混ず。露を拂つて御迹を尋ね奉れば、秋草泣いて淚を沃ぎ、嵐に向つて君が墓を問へば、老檜悲しんで心を傷ましむ。佛儀は見えずして、唯だ朝の雲夕の月を見る。法晉は聞こえずして、唯だ松響鳥語を聞く。軒傾きては曉の風寒く、夢破れては夜の雨防ぎがたし。昔今の御有樣いと痛ましく淺ましく思ひ奉れど、微臣が孤忠を述ぶるに由なく、既に勢竭き力窮まりて、今生の誠忠を訴へ、後世の苦樂を共にし奉り、君につれなかりつる者どもを悉くとり殺さばやと思ふのみ。はからずも大島をのがれ來て、尊靈を驚かし奉るものなり、と申し果てゝ、淚を潸然と落しつ。

文字の修飾に捉はれた氣味はあるが、西行の『撰集抄』や『雨月物語』の「白峯」などと相對して、馬琴の一流を發揮した、とにかく一種の名文である。

四

第三部は爲朝が都上りの船路で、大颱風に逢ひ、再び漂着して以來の琉球に於ける功業を叙した部分である。此の部分に於いては、第一には、尙寧王を中心として、中婦君と廉夫人との間の葛藤、王女寧王女が傳國の寶珠を失つたことについての悲喜劇、忠臣毛國鼎と奸臣利勇との相剋、虬の龍の化身なる魔術師曚雲と老巫女阿公との惡業などを叙した琉球方面の叙述がある。第二には爲朝より數年以前に漂着して、神仙の敎へに從ひ、無人の孤島に文武の修養を積みつゝ、爲朝を待ちわびて居る爲朝の子舜天丸と、八町礫の紀平治とに關する叙述がある。而して第三に

は、紀平治等に數年後れて漂着した爲朝が、寧王女に憑移つた、一身二靈の白縫姫に迎へられて、琉球の革命に參畫する物語がある。此の三條の記事の流れが順逆吉凶いろ〳〵に絡み合ひつつ、遂に爲朝、舜天丸等によつて正義の革命が仕遂げられ、爲朝はたゞての衆望を幾度も振切つて王位を辭しつゝ、遂に崇德院の御靈及び保元に亡びた源家一統の靈に迎へられ、琉球の高官等に名殘を惜まれつゝ、現の中に昇天し、その後舜天丸が推されて王位に即き、舜天王と號したといふのが大團圓で、

あれよ〳〵、とばかりに、招くかひなき天の原、ふりさけ見れば八重雲の、霞にまぎれて見えずなりぬ。

といふのが、最後に近き爲朝昇天の章の最後の句であり、

八郎は是れ富貴の人、爲朝の德、吁至れる哉。

といふのが、此の大作の最終回の最後の句である。

第三部琉球の卷は、恐らく作者が脚色の技巧を用ゐ盡くした最得意の部分であらう。それは人と神と、正と邪と、窮と通と、い〳〵の人事がやゝこしく絡み合つて、目眩くばかりであるが、一面に於いて、技巧が勝ち過ぎた結果の不自然味が、讀者の落ちついた耽味鑑賞を妨げるやうに見える。不自然の要素を拾へば、或は此の部分の半ばがそれともなるであらうが、その中には、忠臣毛國鼎がその武術の方の青年門弟に、忠義の密偵を勤續させる爲めに、王女の腰元と結婚させ、一夜だけ逢はせて、あとは無期限に引離しておくといふ趣向がある。或は横死した妻の亡靈が賤の女に姿を變へて、夫と契つて姙り、半年ばかり經つて殺されたが、その後夫が亡き妻の墓所に詣でると、忽ち霹靂一聲して墳墓が崩壞し、同時に赤子の啼く聲がして、中から男女の双子の、生れて百日ばかりなるが現はれ出でたといふ趣向がある。殊に變化曲折を極めたのは巫女阿公の一生で、彼女は奸臣利勇に方人し、曚雲に使はれて、王女を迫害した。毛國鼎が妻の新垣が孕んで臨月になつたのを襲ひ、その腹を切り裂き、胎兒を奪つて王子に仕立てた。爲朝に襲はれて利勇一派の滅びた時には、王子を抱きつゝ、七首を拋つて鶴亀兄弟の追擊を免れた。城山の奥に王子を養ひつゝ、天孫廟に犧牲の生首を集める際には、鶴亀兄弟に迫られて、王子を刺殺し、鶴亀に斬られたが、その折に語つた最期の懺悔によると、彼女は從一位阿高の女で、阿高が罪あつて鬼界が島に流された時に、配所の父に事へようとして島をたづねた。訪ねると父が已に亡くなつてゐたので、そのまゝ九州に渡つたが、阿蘇の神社に參詣した折に、或る男と一夜を契つた。別かれに臨んで、記念として男の短刀と女の持つてゐた琉球の地圖とを取りかへたが、その男は八町礫の紀平治であつた。彼女はやがて故國に歸つて男の胤を生み落したのが女の子で、

巫女の名に憚つて、密に生んで捨てた。それが先きにその腹を切り裂いて胎兒を奪つた新垣で、鶴も亀も王子も皆彼女の孫であつた。而して剩へ、そこへ紀平治が來合はせて介錯をしてくれたといふのである。實に巧みを極めた趣向で、よくも斯うまで事件を入り組ませて辻褄を合はせたものだと思はれるが、暫らく考へ、再讀し三讀すると、餘りの細工に厭氣をさす讀者も多いであらう。此の技巧過度の傾向を最も多く持つて居るのがこの第三部で、こゝが讀者の好みによつて鑑賞の結果に輕からぬ差異を生ずる所であらう。

第三部にも名文は無數にあるが、こゝには七五調の抒情句のつらね、世に云ふ「くどき」の一節を引くことにする。左は少年舜天丸が琉球の無人島に爲朝を迎へて、父との對面を悅びつゝ母を悼むところである。

別かれ奉りしはわが身まだ、六つか七つの秋なれば、おん顏定かに覺えねど、凡そ生きとし生けるもの、父あれば必ず母あり。年毎にこの島山の、松に生ひ立つ鶯だにも、巢どもる程は父母を、慕うて鳴くにいかでわれ、父をも認らず、母をも認らず、ゆふべの海の吹き荒れて、こゝらへ通ふ磯千鳥も、友呼びかはし呼ぶものを、親とも友とも家隷とも、見るは八町礫のみ、賴むところは神仙の、導き給ひてひとたびは、父にも母にもあはし給はめ。そはいつ頃と果てしなさ、沖を眺めて立ちあかす、朝日の影もわが國の、天なつかしく伏し拜む、神も佛も親の爲め、命長かれ恙なく、世にし在せと祈りつる、神の惠みはありながら、母には絕えてあふよしなく、けふとは知らぬ歡びの、中に歎きを倍さんとは。心筑紫はいづこぞや、波間を披きて白入り給ふと、聞けば今更朝夕に、目馴れし海も懷かしとて、樹の間遠く伸びあがり、伸びあがれども潮けぶり、雲に狹霧に隔てられ、とゞかぬ思ひを喞ち給ふ。

「口說」としては恐らく絕調であらう。吾等は之れを讀んで、そゞろに近松門左衞門が『國姓爺合戰』の樓門の場の口說を思ひおこすのであるが、『八犬傳』の名高い濱路、雛衣の口說などは、必ずしも之れに優るものではあるまい。思ふに『八犬傳』その他、『弓張月』以後の作には、內容空虛の美しい文句を無制限に引き伸ばした嫌ひがあり、また七五の調子を變化なく續けた傾きがある。それらに比べると、『弓張月』には「くどき」が少なく、又長い「くどき」が全く無く、唯だ情の籠つた句を短くつらねて、しかも其の間に七五の格を破つた變化を附けて居るのは、一段の味であると思ふ。總じて『弓張月』に、『八犬傳』に於いてしば〳〵見る、作者が得意な調子の過度の延長と反覆との無いのが、少なくとも此の作のもつ一種の優越要素であらう。

五

最後に吾等は、馬琴がどういふ心持で『弓張月』を書いたかに就いて、簡單に語りたいと思ふ。

馬琴は前編卷頭の序に於いて、

この書、保元の猛將八郎爲朝の事蹟を述ぶ。その談唐山の演義小說に倣ひ、多くは憑空結構の筆に成る。閑者理外の幻境に遊ぶとして可なり。

と言つて居るが、また拾遺の卷頭の序には、漢文で、

弓張一書、雖レ云二小說一、然引用故實悉遵二正史一、並不レ巧借二一事一、妄設二一語一、以滋世人之惑。故有レ源有レ委、可レ徵可レ據。不二獨膾二炙一時一、允傳二信千古一。

と書いて居る。「これは興味本位に作り上げた空想の所產だ。讀者はたゞ其の面白さをめでて、魂を夢幻の境に遊ばしてくれゝばよい」といふのと、「引用する故實は悉く正史に據つたので、一事一語でも、上手めかして妄りに作り加へたものがない」といふのとは、大分相違した建前で、これが常識のある作者が自分の作つた同一の物に對して言へることかと疑はれるやうであるが、事實、馬琴の頭には、此の矛盾した二つの考へが同時に共存してゐたので、彼れは怪しまずに彼等を驅使して、此の『弓張月』をも、又他の讀本をも作つたのであらう。彼れは自分の趣向を面白くし文章を立派にする爲めには、極めて自由に、有つた事を無いとし、無かつた事を有りとし、死んだ人を生きたりとし、生きた人を死んだとし、孤立した事にも關係をつけ、有り得ざる事をも存在せしめた。此の小說に寫した爲朝が京都、九州、四國、大島、琉球に於ける事蹟の大半は恐らくそれであらう。彼れはまた常人の知らぬやうな事、常識の怪しむやうな珍奇の叙述をなす時には、必ず、或は作中の人物をして一席の辨證を演舌させ、或は本文と離れた序や、跋や、隨時挿入の但書、割註等に於いて、其の根據あることを縷說した。伊豆の島々や琉球に關する事は言ふ迄もなく、「金毘羅」の名號に關して、凡そ小說の本文二回分位の長々しき說明を加へて居るが如き、大時化に吹き搖られて命懸けの苦惱をつゞける船中に於いて、爲朝をして颶風颱風の區別や起因經過を講釋させて居るが如き、殊に甚だしきは、七歲にして本土を離れ、海中の孤島に八町礫たゞ一人を相手として數年を送つた舜天丸をして、神代史や風俗通によつて仙桃の故實を說かしめ、漢土に於ける母衣の故實を考證させて居るが如き、皆此の心理の顯はれである。蓋し馬琴が頭腦の中には、面白い趣向を立て、立派な文章を綴らうと努力する作家心と、正確深邃なる知識を豐富に蓄へて居ることを示さうと望む學者心とが、同じほどの勢力を以て、而も爭はずに共在してゐたのであらう。而して彼れは此の腦中の非凡な二つの心を、同格に尊敬したる結果、感情本位なる小說を作る時に於いても、方面違ひなる學者心の退場を求めることが出來なかつたのであらう。一體馬琴は人に對しては極めて嚴格であつたが、我が持つ能力に對しては大甘々の

弱腰であつた。その結果が彼れをして、情本位の藝術なる小説創作の場合にも、領分違ひなる學者心に打壊しの容喙を試みさせて、玉の如くなるべき折角の藝術小説を臺なしにしたのであらうと、吾等は考へる。

馬琴は本來慾の多い人であつた。從つて彼れは我が第一專門の小説を書く間に於いても、小説の本領以上もしくは以外なる傍系の事をいろ〳〵考へたのであらう。その一つは上に擧げた知識を誇ることであつたが、もう一つは小説によつて道義の効果を贏ち得ようとすることであつた。彼れは負けず嫌ひの見識屋で、我れには道義の師家たるべき本領があるけれども、假りに身を下し、戯作によつて愚夫愚婦を感化するのだといふ誇らしい建前を持つてゐた。彼れは、一つは此の尊大な見識により、一つはまことに世を憂へ、民を愛する高尚な性質の示唆により、更にもう一つは、その師京傳から得た繼承によつて、その小説に勸善懲惡といふ道德的及び宗教的の要素を導き入れることになつたのである。而して此の道德宗教の要素の參加は、小説に第一義底の重要味を加へるものではないけれども、それは知識の要素の如く藝術の美味を害ふものではなかつたので、多少は鼻につきながら、さまでは小説としての藝術味を害はなかつたのである。のみならず、それが寛政新興の時潮に合流した爲め、また同時代の低調なる草紙群との對照を見せた爲め、一段と彼れが小説の地位を高めることとはなつたのである。

馬琴が『弓張月』に對して、もう一つ望んだことは、尊皇愛國の思想の鼓吹であつた。彼れは爲朝をして平家その他に對しては、あれほども傲岸不屈の抵抗をつゞけさせながら、皇家に對し奉つては、常に兢々拜跪の態度を取らしめた。一旦御味方した崇德院に對し奉つて、生涯奉公の足らぬことを御詫びしつゝ、屢〻生命をさゝげようとしたと記し、また屢〻院の御靈の御救助を蒙りつゝ、遂に院の御迎へに陪して天上に登つたと書いて居るのも、その爲めであらう。また琉球に入つても、常に皇室を尊び、日本を忘れず、或は變はつた事のあつた場合には、

時方に大日本人皇八十代の天子、高倉院の御代しろしめす安元二年丙申秋九月二日也

など書きたるが如き、出陣の折に、海の彼方の島國で、天照大神、男山八幡宮、阿蘇明神の旗を飜させたるが如き、或は舜天王が王位に卽いた翌年、七星山の北に宮柱ふとしく建てゝ仙傳の征箭二條を天照太神、八幡大神と齋ひ奉つたといふが如き、皆作者が尊王心、日本愛の深く切なることと、その思想を鼓吹する宿望のあつたことを證明するものである。

かくして吾等は、最後に言ひたいと思ふ。『弓張月』は、馬琴が鎭西八郎の男に惚れ込み、殊に日本人的の美質を美しく具備して居るところに惚れ込み、多くの文獻口碑を渉獵して、それを

ば成るべく面白く、そして成るべく史實の根據があるやうに、而して內容に相應はしい名文で表現するやうに努力して書いたものである。而して補助思想としては、世間同胞の道義を高め、殊に皇室尊重、日本愛護の精神を鼓吹するやうにと念じて書かれたものであると。而して中心人物の立派に描かれて居る點や、文章の無駄が無く締まつて居る點等に於いては、『八犬傳』に優るとも劣らぬものであると。

（昭和十六年五月）

大日本古典の偉容（終）

五十嵐力著作目錄（單行本のみを擧ぐ）

和洋禮式（西洋禮式の部）	明治二十八年	博文館
文章講話	明治三十八年	早稻田大學出版部
兒童之研究	明治三十九年	金尾文淵堂
新文章講話	明治四十二年	早稻田大學出版部
實習新作文	明治四十三年	早稻田大學出版部
新國文學史	明治四十五年	早稻田大學出版部
國定讀本文章の研究	明治四十五年	二松堂
趣味の傳說	大正二年	二松堂
作文三十三講	大正二年	早稻田大學出版部
半農生活	大正三年	弘學館
我が書翰	大正五年	至文堂

高等女子新作文　大正五年　大日本圖書會社
中等新作文　大正六年　至文堂
八重むぐら　大正六年　敬文堂
實業新作文　大正八年　修文館
評釋國文史　大正八年　博文館
修辭學大要　大正十二年　斯文書院
平家物語の新研究　大正十二年　春秋社
甲鳥園隨筆　大正十三年　銀鈴社
國歌の胎生及び發達　大正十三年　早稲田大學出版部
甲鳥園書簡集　大正十三年　斯文書院
國語の愛護　昭和三年　早稲田大學出版部
野草集　昭和三年　雄文堂
我れ面白　昭和三年　雄文堂

遠近　昭和三年　雄文堂
水莖　昭和四年　雄文堂
雲來去　昭和四年　雄文堂
純正國語讀本　昭和四年　早稲田大學出版部
我が三大國民道　昭和四年　早稲田大學出版部
口碑珠玉　昭和五年　雄文堂
軍記物語研究（倍加）　昭和六年　早稲田大學出版部
省勞抄（十卷、非賣）　昭和八年　早稲田大學出版部
平家物語の新研究　昭和八年　春秋社
純正女子國語讀本　昭和八年　早稲田大學出版部
國語の愛護・部分品　昭和八年　早稲田大學出版部
六十一莖集　昭和十年　早稲田大學出版部
我執轉（々十二）記　昭和十二年　東宛書房

平安朝文學史（上下二卷）　昭和十二年　東京堂
國語の愛護（改修）　昭和十三年　白水社
戰記文學　昭和十四年　河出書房
日本傳說集　昭和十七年　第一書房
大日本古典の偉容　昭和十七年　道統社

昭和十七年十月十日印刷
昭和十七年十月十五日發行

出文協承認番號（あ100446號）

定價　五圓五拾錢
發行部數　二、〇〇〇部

大日本古典の偉容

著者　東京市豐島區巢鴨町　五十嵐力（イガラシ・ツトム）

發行者　東京市麴町區有樂町一丁目十四番地　岩壁保

印刷者　東京市芝區片門前二丁目八番地　山縣隆定

發行所　東京市麴町區有樂町一丁目十四番地　株式會社道統社
電話銀座五四一一番
振替東京一六五六一番

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

ヨ9F12

日本古書の特色

発行者	株式会社 [illegible]
印刷者	山 [illegible] 利 [illegible]
製作者	株 [illegible] 所
発行所	株式会社 [illegible]
定価	一、〇〇〇円
昭和四十九年十月十日発行	
昭和五十九年十月十日第四版	

落